

俳諧大意
並口伝

06 (三)
俳諧資料カード

年代

(大元)
甲子乙未

編者
(筆者)

鳥飼潤清

書名

俳諧 活玉抄

備考

石色
博物誌

(下垣内蔵)

貝原先生歲時增選

鳥飼洞齋翁編述

改正月令

博物筌

全部

此書古甲子年彫刻スレトモ
州稿駁雜ニシテ且傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル
諸先生校閲ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書ノ
正シクナリタルヲ好タニシテ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス



草

一年三百六十日日

日無邦無故實時令

妖遊及國風偉哉抄

録収細帙

筱應道題



5511

採觚箋費細

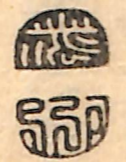
工夫業就堪

供詞客厨時

令天文盤托

出如魚州木
帙分巨蔡笈
它又帳中秘
張說平生掌
裏珠寄語風
流多執子休
為博物小人
儒

南豐題



日初月為是
事浩瀚古性
正々備芥燦
爛

壬樂

Handwritten notes in cursive script, including the characters '水落竹隈氏' and '道孝'.

水落竹隈氏
道孝

せしむるに有るは、
中々、探りては、
かみ、みまを、
流し、みまを、

流し、みまを、
と、みまを、
と、みまを、

華洛
得因齋筆

世より、
く、みまを、
流し、みまを、
流し、みまを、

月や、
井眉

の、
の、

○俳諧大意並口傳

一、七言、
の正節と、
節禮記之、
花実の時、
俳の季節、
の何る故、
印を委、

一、連歌、
と究む、
渡しの為、
分置、
と著、
加、
る、
連、
れ、
春、

連俳の初夏の景物と定既小
 宗砌法師の句小
 春暖るる花のさうはや必を
 く断りしるも深き詠有詩と
 歌の一章一首のりのか連歌を
 百句はけりねり名を 誹諧又
 式を連歌の擬と然る夏冬
 のことたの景物少く懐紙乃見
 渡りしるりしすよめて古今集
 の巻頭小年内立春わねと連小
 へ冬と定雪月花の三つ夏小及
 ち守故小燕子花牡丹ちと夏
 とん中々私小さむむと事な
 らよびるせりる翁も季寄
 の格の御傘をまの草小過と
 とくや申しとと本文の内秘授
 口決小及んでい文のわがたを
 厭ひ畧せりとも多し追て博
 物全補遺と出して悉く註し
 此例終

引用書籍目録

此各本文注解トモ一々出處ヲ記
 サズト魚トモ一事モ妄リニ筆スルニ
 非ス左ノ各ノ内ヨリ板各ス此各
 編述シテヨリ凡三十年ノ間儒者佛者
 和學者職原家哥人俳人天文者
 其外諸先生ノ訂歩歴テ漸ク當年各成

万葉集	古事記
日本書紀	日本歳時記
文德實錄	三代實錄
拾芥抄	五家髓腦
延喜格式	源氏物語
伊勢物語	栄花物語
枕草紙	徒然草
北一代集	藏壺集
莫傳集	新撰六帖
夫木集	定家三部各

順和名	筑波集
大和本草	本草綱目
本草拾遺	花鏡
月令廣義	採取月令
三才圖會	輟耕錄
陪 昏	前後漢昏
梁 昏	唐 昏
字 彙	後 晉 昏
博物筌	爾 雅
四 昏	五 經
涅槃經	法 花 經
杜 律	華 嚴 經
白氏文集	李 白 集
文 選	唐 明 詩 集

引 昏 目 錄 終

月令博物筌 大意

一此書正月門松ヲ立ルヨリ年終迄
 年中ノ歲事故事ヲ集ム上禁中
 公事故實ヨリ下四民ノ諸式法月
 異名草木・鳥・虫・獸等迄不
 殘集メ来由故事ヲ述譯ヲ委レシ
 記シ異名漢名迄不洩集二月
 一冊トシテ正月ヨリ十二月迄ヲ二冊分ル
 一草木種類花形其外何ニ依文ニ
 テ分リ難キモノハ夫々圖ヲ出ス
 一條毎ニ哥・哥ノ詞・連哥・能借・
 狂哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々ニ加ヘ
 作例證據トス
 一生花ノ正式衣服ノ正式養生法食
 物善惡料理献立年中吉凶米
 豐凶ヲ知法草木植様・藥物
 貯ヤウ・妙術・妙菜・風雨ノ考
 等何レモ月々日々ニ記ス
 一年中ノ公事祭・草木・生類其外何ニ
 不依是迄能借ノ季ニ用ヒ来物ノ印

ヲ付ル但正月季ニ有物二月ニ有用ル物ハ
 ③印ヲ附ル十一月正節立節春成能ニ冬ニ成物ハ其條下ニ註解ス
 四季折々遊山翫水等ノ手紙ヲ其節序ニ加ヘ尺牘ヲ旁ニ付テ上中下ノ各替ヲレレテ漢文ヲ作ル便リトハ漢文淺字ノ人ト云此各ヲ見レハ即時ニ文章作ラルヤウニ設タリ此各雅俗日用重法ノ各ト云元來ノ哥ヲ詠能惜ヲ作ル人爲ニ撰合各ナリ故ニ七十二候ハ毎月六候ゾ出ヌ有來ル生類七十二候也草木七十二候有他各ニ無キ物ナリ此本ハ出外ヲレテ委レシ註解ス其外是追他本ニキ季ニ成物多々出シ古哥ヲ加ヘ作例トス
 一詩詩礎詩聯尺牘多々出シ詩作ニ便故ニ哥人能人詩人博學ト云失忘ニ備ヘ右此各大抵ヲ舉ゲ示ス年中ノ事多ク品類チレハ一々例ヲ記スニ暇マラズ次ニ門部分ノ大意ヲ記ス

大意終

門部分並目錄之註

正月

始めの丸の印此内ハ其月乃干支・八卦の其月ハ當る卦調子の其月ハ當る律呂・陰氣陽氣の生じる數と記シ次ハ其註と解

節立

此丸の印の内ハ其月の節・七十二候・草木七十二候・昼夜の長短・日の出入外の方角と記シ次ハ右の註解と委レク各々

中雨

此丸の内ハ節より十六日ハ中ニ七士候日出外其外曼出と夏節同

日令

此部ハ其月日決定りたる事ハ夏行事・五節句式日・諸祭・風雨の考ハ養生の法其外日の定り入用の事と出

月令

此部ハ日の定まらざるその月一ヶ月の事とあり

時令

此部ハ時氣拍りたる事と出譬ハ正月の初春・餘寒等の事又三月の暮春・三月

尺、み、く、時侯、ふ、か、る、事、と、の、と

草木

此部ハ其月の草木と集む但妙茶さる物ハ病症用ひやうと記す

生類

此部ハ其月の奥・鳥・虫・獸等諸の生類とあつむ

必用

此部ハ日の定まらざる其月一ヶ月の養生の法・風雨の考・米の豊凶・妙術・天氣占候・料理献立其外入用の諸の雑事とあるす日の定りたる事ハ口の日令の如ニあり

故事ハ如此かここの内ニ有白字ハ一なる如モあり

此のぞくたの妙茶なり

詩哥連能ハ始ふ此のぞくたるあり次ハ一ぬ如モあり

異名尺牘ハ始ふ如モ印あり

日々養生の法・風雨の考・五穀諸品の高下・季と持以諸祭・妙茶・妙術・詩哥連能故事其外日々重法ある雑事ハ部々ハ枚多あるゆ目録ハのぞくと本文と見て知べし

正月部目録

△印ハ俳借の季をり物あり

養生の法。雨風の考。米の豊凶。妙茶其外人家重宝の事ハ如々あるゆ目録ハあるとせん

發端

春の異名 春の由来 正ノ 二丁

正月

卦 月支 調子 正ノ 三丁

正月古今違

△立春節 正ノ 四丁

△若水

△雨水 正ノ 四丁

正月日令

此部ハ正月日の定りたる事と集めあつむ

△元日

△元日異名 正ノ 北五丁

△元日賀

△四方拜 正ノ 十丁

△星と唱ふ

△屠蘇白散 正ノ 十丁

△朝拜

△院拜礼 正ノ 十丁

△元日節會

△諸司奏 正ノ 十丁

△七曜御曆

△氷様 正ノ 十丁

△腹赤

△國栖奏 正ノ 十丁

△菌固 キノコ 正 幸 正 鏡餅 カキモチ 正 今

△門松 カドマツ 正 今 正 注連飴 ツルネアムロ 正 今

△大飴 オオアメ 正 今 正 惠方 エカタ 正 今

△門神棚 カドノカミ 正 今 正 蓬菜 フキ 正 今

△雑煮 カクシ 正 今 正 料物 リョウモノ 正 今

△太箸 オホシ 正 今 正 関豆 セキマメ 正 今

△加賀御草 カガノミクサ 正 今 正 鯨鱈 クワダ 正 今

△押鮎 オシアサ 正 今 正 俵海鼠 ヒラシ 正 今

△小殿原 コノノハラ 正 今 正 海龜 ウミカメ 正 今

△螺肴 イシヤク 正 今 正 掛鯛 ウケタイ 正 今

△葩煎賣 ハナセウ 正 今 正 年男 トシオトコ 正 今

△大福 オホフク 正 今 正 福藁 フクワラ 正 今

△庭竈 ニハク 正 今 正 福鍋 フクナベ 正 今

△幸木 サイギ 正 今 正 鬼打木 オニウチキ 正 今

△毘沙門功德經 ヒサモンクツデキョウ 正 今 正 若戎 ニハヒ 正 今

△星佛 ホシブツ 正 今 正 懸想文賣 ケンソウモンバウ 正 今

△初鶏 ハツトリ 正 今 正 稻積 イネツキ 正 今

△初夢 ハツユメ 正 今 正 三物連歌 サンモノレンカ 正 今

△三物俳偈 サンモノハイカ 正 今 正 祇園削掛 ギエンセウケ 正 今

△初春 ハツハル 正 今 正 正月日の定まらざる歳旦と 正月日の定まらざる歳旦と

△若餅 ニハヒ 正 今 正 破魔弓 ヤクマユミ 正 今

△羽子板 ウツロイタ 正 今 正 胡木比子 コノキヒコ 正 今

△毬打 タマウチ 正 今 正 玉打 タマウチ 正 今

△宝引 タカラヒキ 正 今 正 年玉 トシタマ 正 今

△書初 カキハジメ 正 今 正 去年今年 クノトシコノトシ 正 今

△毬はく タマハク 正 今 正 御降 ミカダリ 正 今

△三ヶ日 サンケジ 正 今 正 松の内 マツノウチ 正 今

△春永 ハルノトシ 正 今 正 藏開 クラノヒ 正 今

△湯殿始 ユドノヒ 正 今 正 弓始 ユミノヒ 正 今

△ひめ始 ヒメノヒ 正 今 正 馬乗初 ウマノリ 正 今

△着衣始 正午
△曆開 正午

△春駒 正午
△年礼 正午

△鳥追 正午
△大黒舞 正午

△諷初 正午
△春鶯囀 正午
△梅が枝調 正午
△青柳詠 正午

△乘初 正午
△眞のり初 正午
△舟のり初 正午
△駕乗初 正午

節 正午
△節小袖 正午
△櫛飯 正午

△鍬初 正午
△水祝 正午

△籟初 正午
△御慶 正午
△履新慶 正午
△叔氣 正午

△歳且句の説 正午
△初子日 正午
△王子日衣 正午
△王子日衣 正午

△若菜 正午
△七種若菜 正午

△初寅 正午
△初卯 正午
△如杖 正午

△二宮大饗 正午
△朝覲御幸 正午

△臨時客 正午
△告朔 正午

△真那切初 正午
△商初 正午

△天狗酒盛 正午
△船玉祭 正午

日三
△たろやく 正午
△裏白連歌 正午

日四
△鏡開 正午
△福じし 正午

日五
飛鳥井蹴鞠初 正午
△叙位 正午

木造初 正午
△万歳 正午

△猿引 正午
△天壽生身供 正午

日六
△六日年越 正午
白馬節會 正午

△御弓奏 正午
△御修法 正午

△七日正月 正午
△菜摘川神事 正午

日八
△御齋會 正午
△大元師法 正午

△真言院御修法 正午
△女叙位 正午

△女王賜祿 正午
空也堂鉢叩 正午

△箕面富 正午
吉唇奏 正午

日九
△居篋 正午
△帳釘 正午
△帳祝 正午

日十
△夷祭 正午
△常陸帯神事 正午

日十一
△御具足鏡 正午
△具足鏡開 正午

△縣召除目 正

△花朝節 正

△住吉御弓 正

△踏歌 正

△十四日年越 正

△土龍打 正

△御薪 正

△平固御粥 正

△御穂祭 正

△女踏歌 正

△明神々詠 正

△禁裏伶人の舞御覽 正

△賭弓 正

△吉田社清板 正

△九日だんご 正

△事始 正

△解齋御粥 正

△削花 正

△頭排綿 正

△繩引 正

△三卷打 正

△赤小豆粥祝 正

△上元 正

△獅子頭神事 正

△走百病 正

△十六日櫻 正

△鶴包丁 正

△幡厄神祭 正

△骨正月 正

△嚴嶋祭 正

△内宴 正

△初天神 正

△外記政始 正

△偶俚師 正

△初芝居 正

△歳旦開 正

△正月男女衣服式 正

△時令 正

△初春 正

△春雪 正

△雪解 正

△山笑 正

△草木 正

△松の花 正

△梅 正

日三

日

日五

日十

日十五

日二十

日二十五

日三十

日三十五

日四十

日四十五

日五十

日五十五

日六十

日六十五

日七十

日七十五

日八十

日八十五

日九十

日九十五

日百

日百五

日百十

日百十五

日百二十

日百二十五

日百三十

日百三十五

日百四十

日百四十五

日八光

日九光

日十光

日十一光

日十二光

日十三光

日十四光

日十五光

日十六光

日十七光

日十八光

日十九光

日二十光

日二十光

日二十光

△内宴

△初天神

△正月令

△外記政始

△偶俚師

△初芝居

△歳旦開

△正月男女衣服式

△時令

△初春

△春雪

△雪解

△山笑

△草木

△松の花

△初不動

△御忌

△店卸

△夷廻

△三節

△正月九月の説

△余寒

△残雪

△春水

△日待月待

△梅

△嚴嶋祭

△骨正月

△走百病

△獅子頭神事

△内宴

△初天神

△正月令

△外記政始

△偶俚師

△初芝居

△歳旦開

△正月男女衣服式

△時令

△初春

△春雪

△雪解

△山笑

△草木

△松の花

△初不動

△御忌

△店卸

△夷廻

△三節

△正月九月の説

△余寒

△残雪

△春水

△日待月待

△梅

△嚴嶋祭

△骨正月

△走百病

△獅子頭神事

△土筆 正 半 正 △福壽草 正 半 正

△以れ若葉 正 半 正 △若草 正 半 正
△木芽齋 正 半 正 △木芽漬 正 半 正

△下萌 正 半 正 △木芽齋 正 半 正

△若根蓮 正 半 正 △藥 正 半 正

△水菜 正 半 正 △薑 正 半 正

△鶯菜 正 半 正 △落莖 正 半 正

△田とと 正 半 正 △堀入大根 正 半 正

△生類 正 半 正 暖小の正月の鳥けさりの魚
虫のさいをあらわし

△猫の毒を 正 半 正 △白魚 正 半 正

△朝鷹 正 半 正 鷹の種さい色々あり

△鳥さる 正 半 正 △浅蜷 正 半 正

△飯鮓 正 半 正 春駒 正 半 正

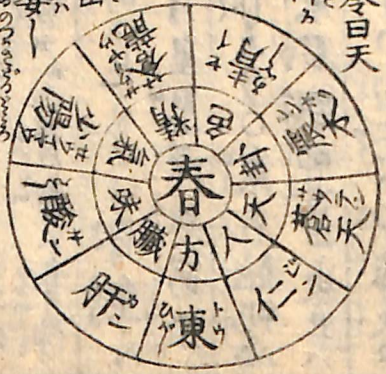
△必用 正 半 正 此部ふの風雨の占。破軍の向方日取
のよりあり。他行の心得。作事の吉

△山料理 正 半 正 山料理 正 半 正 山料理 正 半 正

△正月一日の定まり 正 半 正 正月一日の定まり 正 半 正

月令博物筌發端

九る内ふかたさるる春の氣の旺る所
と記さるる月令曰天
の陽氣下り降る
地の陰氣上り
騰る天地和合
交泰する故草
木芽はち萌出
發生とく委
くの第二葉春爲主小



春由来

漢書律曆志云春者
蠢也春虫とい物の動き生
どる貌あり。○本朝ふての齋部正
通説云春之言發也草木芽發
也云月令天地和同。草木萌
動といるも同一心之万葉集第九

哥 山塚の久世けつ坂神代

是と以て考合の芽のちると云説を
万葉集とて據とさるるあり

惣じて本朝の古言古訓と云い万葉日本紀古事紀ふよりてとるべし
或説小春といふは晴といふ。空麗
小晴るといふ心ありといふ

春異名

太皞 青帝 青皇
東君 勾芒 蒼天

青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云い唐土伏羲帝のこと

木徳の君と云い唐土昔より世々

小日本の年徳神と祭るがおとく春

乃初小祀と云い禮記月令云太皞

伏羲木徳君云○青帝は春神

ありと楚辭小見と云い○青皇も

春の神と云い青皇恩澤無窮限

など詩小作と云い○東君郊祀志

曰晉巫祀東君顔師古曰東君

日の神あり○勾芒は少皞氏の

子重といふと木神と云い春の神

と云い太皞と合せ祭るなり

○蒼天といふ氣の初て發して

色蒼々といふと云い稱と云い青
陽の天地の盛徳春の木は有る木

色青々といふと云い青陽と云い陽和

といふ白居易が詩小先遣陽和報

消息と云い有るよりつらつら○花蓋といふ

夏候湛が賦小春可樂兮綴雜花

以為蓋といふより云い○迎陽と云い

立春といふより○韶光といふ韶の

美也云云春の景色のうらやま

といふ猶漢書律曆志小媚景

或い韶景といふもねむり也

と云い○瑤通の續漢書小見と云い

○解凍といふ礼記の月令小出

と云い○新陽の詩學大成小出

○微和といふ陶淵明が詩小出

○華始といふ礼樂志小出○歳始

公羊傳小見と云い○蠢生といふ律

曆志小出と云い○木徳の震官初

動木徳唯仁

と云い階青帝

と云い歌小見也

春為主

東也

云の易の説卦傳曰帝出乎震
 齊乎巽又曰萬物出乎震震東
 方也又曰兌正秋也萬物所説
 也これとこもいば震之正春あり
 して明也○陽仁者の徳小
 して春陽の氣仁の道と守○
 蒼天といふ春の東方の正色蒼々
 然として晴故蒼天といふ○卦の
 震はて震の木の象○色の木徳
 青緑と主る故青陽といふ
 礼記の春と東郊ふひて青馬七
 匹を用やといふ○精は蒼龍とい神の
 体精へ用也春の用能發生と龍乾
 の用はて陽の靈能動発と速盛を
 る象○少陽勞陽少陰勞陰の四象の
 初て春の氣之是少陽明厥陰と加へて
 六氣と云○味は若と主る○肝木屬
 春の肝尤旺とる死氣肝小入あり
 △右の外春三月の季乃りの三月
 の部乃ともいふとす

正月乃部

△ちる有へ未まき
り物え



○十一月地中に
 陽生十二月
 二陽生正月
 三陽生
 ○十一月小
 子の月とす十二
 月は正月寅あり

異名

取月 端月 △孟春 發春
 獻春 規春 開春 上春

初春 發歲 三陽 初陽 暮新月
 新陽 謹月 △太簇 夏正 睦月
 かとみそあ月 從ひ月 右命月
 どのの月 年終月 △初室月

異名註

○正月と一月といはして
 正月といふ正しき也

い義あり○正月と謹月といふ正
 月の始を謹むべしとて伐とをえ
 ○正月と太簇といふは太いなること
 訓簇とてむとよき春の陽

氣ふて万物とぞみ生どる心あり
○阪月とよふ尔雅曰正月の夏と

いふ阪の寅のころあり○夏正と云
唐土夏の代より寅の月と正月とする

ゆへ名ざくるあり○睦月といふを
清輔奥儀抄に如く貴き賤き

むつまぐくゆきまきあり○むつまぐく
とよを畧してとある○暮新月と云

年れて新き月とあり方故名づく
○太郎月といふ俗人の子に初生

らると太郎といふはごお生きたるか
次郎を名づる故正月の初月故名づく

哥 初ま月 藏玉
辰うのま月朝日くけ
のどけと名やるふるん

哥 初空月 後鳥羽院御製
まのるやるさうながるままを
さえゆゆのまを乃月

哥 端月 御集
まのまきくくよとあぬまむの
いざらにふる山のつ乃月

正月古今違 一年十二月の干支を
定む其月の中節

十六の星の斗柄建取の干支と以て
定る斗柄のたんとことろといふ俗

正月中十六節の星の斗柄寅卯建故
正月と寅の月とさむむあり

○唐土夏商周右三代正月別々
夏の國禹王の世は寅の月と正月

今の正商の湯王の世は卯月と以て
月と今卯の土周の文王の世は子乃月

と以て今卯の正月と定むあれとて
一理あるをたり天を子卯開くと以て

周の子の月と正月と定め地を卯開く
少商の世の月と正月と定む人の寅

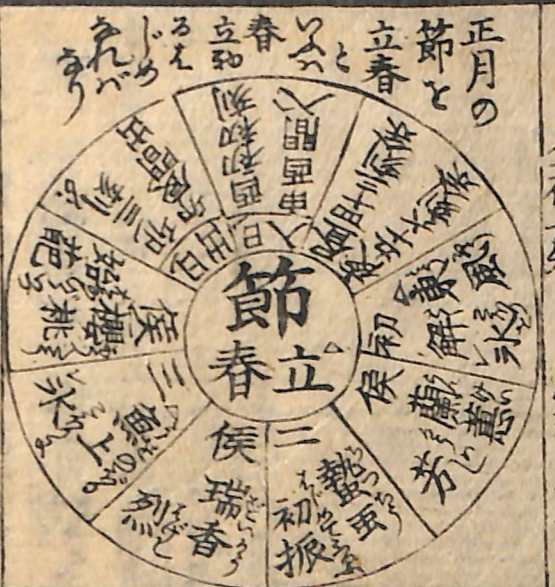
定むゆへ夏の寅の月と正月とさむ
天地人開き初らり其後秦といふ世

て古典と悉く改めて亥の月と以て
正月と定む今卯漢の代も是なり

しが武帝の時始て古代の通り改め
寅の月と正月と定め今も寔存す

本朝の神代より寅の月と正月と定めて變ざる夏也此論春秋正月節としくる書小委しかりる事あり見さべし

節。立春。七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日出入等左記と



△東風解氷といふ冬の寒風よそ氷も春の東風と受て解初し。蘭蕙も風蘭也。蟄虫の冬虫の地中より出る。瑞香の春の氣にてそろく出る。瑞香の遊といふあり。櫻桃の庭櫻あり

立春天氣 立春よ北方か紫緑白の雲

あまの三素飛雲と云て三元君天上よ諸より日なりはるるて再拜とよし必し福わりと階書に見しり○三日晴天を

豊年○前後三日の間風雨少しあまの其後四五六日の間天地の氣よくのいて万物うはりりさる又人の身も安全めで病少しと

り若し又四五日と前よ雨あまの其後四五日風雨あまく四五日と後よ風雨あまの**立春占候**

此日四方よ黄より雲氣あまを五穀よく實のり青より雲氣あまは虫五穀とやがる○日いささ出ざる時東よ黒雲あまを春雨多し西よあまの秋雨多し

東方よ

ナリ百姓皆會日春

泥牛

内年

ヨリ土ニテ牛ヲ作りオキ
寒氣ヲ送ルノ月令ニ見タリ

綵

燕

歳時記ニ立春ノ日悉ク
綵ヲキリテ燕ヲ作りテ

宜春ノ文
字ヲ貼ス

賜綵勝

唐ノ朝
廷ノ制

ニ立春ノ日侍臣ヲ望春宮ニ
召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝

花トテ作りハナヲ賜フ由
文昌雜錄ニ見ヘタリ

農

祥正

農祥ハ房星ノ精ナリ
正レトハ晨ニ南ヲ

ニアラハル、ナリ

葭灰ヲ飛

國語ニ見ヘタリ

立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ
端ニモリミテ、オケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ飛ヨシ委
シク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽

後漢書ノ祭祀志ニ
云ク立春ノ日東ノ郊

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節ニ
ナ青、青陽ヲ歌ヒ雲鬢ヲ

舞フトイヘリ
歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句

同上

詔光開令序

惠風初應律

淑氣動豐年

和氣正調梅

詩 立春七字對句

詩 礎

三陽候節金為勝 氣象新

百福迎祥玉作杯 應陽春

若水 新水去年の生氣の方井
を鎮めて蓋をして人又汲

奉之朝餉 日主水司内裏
奉之朝餉 日主水司内裏

たり 新玉の春 芳日 奉まば 若水と 去去年より 井を封じ 置

包井 開くとも 俗母若水を 元日とする 委しく 世三丁めあり

○年中行 兼 哥 各 志をえて 水氷の 色を 紅く 河を 義 君を みる じ 河を 見 とも ば 初めの 初め 俊頼

元日 立春

○万葉 久々の 春 山

け 夕 長 哥 合 立春 頭朝

○連 春 まで ころの 始 春 宗 因

○狂 古今 夷曲 哥 慶

○俳 春 宗 因

○詩 元日 立春 五字 對句 同上

春城 映朝日 綵仗 迎春日

緑柳 搖春風 細煙 接瑞香

○詩 元日 立春 七字 對句 詩 礎

瑞色 含春 當正殿 轉綠 蘋

香煙 捧日 在高樓 瑞色 新

瑞氣 朝浮 五雲閣 紫氣 中

朝光 夜吐 萬年枝 曲 迎春

春風 掩映 千門柳 四海 中

○詩 元日 立春 節 瑄

散臘 迎新 淑氣 回

又春ニ立ケル乾坤此日泰初開

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

庭前積雪徐々化天地ノ陽氣ヲ得テ

雪モツロクト天上和風習々来

ケフメルナリ

△十二月 移んかい 年内立春 元日とりのまゝ今も春乃

節あるとよみ連俳

小ハ十二月の季と定むといふ

和哥の式は雀して此處より出と

哥 續古今 入道前大政大臣

春の始ふといふとめふるもさし

とけ内あるま乃あけがの

詞 春の内ふ春よりまはぬ

年。春のまはるまはるまはるまはる

るがう。冬もあまふ。春のまはるまはる

年。春のまはるまはるまはるまはる

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスム

トヨリ長生ユヘ日月モ 仙人ノスム

トコシナヘニメグルナリ 送臘

迎春亦寂然 冬ハクレ春ニ

コトモナクモノシツカニシテ各別ニ

アラタニリタルコトモナキトナリ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアソブコトハ常ノコトニテ

故事ヲアミタ云ヒツタフルナリ

金花線勝作新年 金銀ニテ花ヲ

瘦病を除く方 立春のいのち

子の日蔓菁を搗むはり汁を

とりあまきれて家内とを

小服とれば疫病を除く

中

七十二候。草木七十二候。日出。昼夜長短委しく尤ふ記と

正月節より十六日まで



この下は各名づく

獺ハクセツハ常小魚とさうて喰ひ命とほさぐ
ゆへ其息を報じるとして春のちり

多々小魚をとりて祭ふるあり

徑草ハ道辺の草也昔々と成ナリ鴻雁

の事ハ陽氣ヨウキなるに次第シダ小南より北へ

師シの望春始放ノゾミと云夏ナツ初ハツメ轉マと看ミ草木

百花陽氣ヨウキ惠メれて梢エダ芽メ立ち萌モ動ウ

形カタの多オホく名ナづく

梅ウメ翁ウ

日令

正月日

の定り

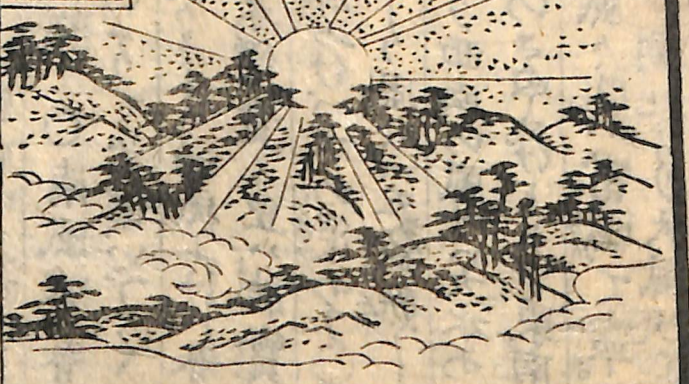
干支の

定り

此部

あり

日令



朔元日異名ウチ看ミ

鶏日

今日と鶏日

方朔ホウシュク占書シキハ出デて八日迄ヨチ悉シく

名あり其日天氣和順ワカなれば其

名づる所のみのさうるとあま

ども其理通スがに此事貝原先

生日本歳時記ニッポンハ委ウしく弁ヘンあり

見るべし面白オモシき事コトなり

天氣

元朝ゲンテウ々々く大雪オホふ多オホく
旱年カンネンとあるべし晴天

されば年ゆきなりて人民安し
 風雨とれば米價貴し○微風
 細雨あれば梅雨の内日和長し
 秋洪水あり○三ヶ日の間風雨
 多くありて日色と見えれば二年
 の大美をたつことな○四方晴天
 自然と和氣ありて春のけしき
 うららかなるを豊年とす雨みも
 わびしくて黒くありて陰々なる
 も又美なり○東風吹は夏に至
 りて米價賤し○南風吹は春
 より夏ふりて米價のややく
 又旱をたつことなる西風ふけば春
 より夏の米價貴し豆ハ能實
 のよく北風ふけば水の災あり○
 今朝東北より風吹は五穀熟し
 て年豊あり西南の風吹は大水あり
 て耕作のさぬむげとある東南
 の風り南風り吹は雷鳴て寧
 かつす○今朝北より大風吹む

春の中人民病ありたると大風多
 ども北風吹は春の中多く病あ
 るべし○終日北風吹は其年とる
 方より風ふけば旱の事あり○南
 風吹は病の事あり○南
 方より風ふけば旱の事あり
 ○今日大風吹は蚕破きて糸の
 價貴し又五穀のくず○天晴
 くと暖ふて風ふれば五穀よく
 熟しと米價賤しと人民安全
 ありて病もふくゆとあり○今日
 雪ふれば豊年又
占候 元日甲
 旱とつことなる
 米價賤しと或いは人民疫
 病を煩ふとありしふれば米價
 貴しと或いは人々病ありと雨ふあ
 られば四十日の旱ありと下にあ
 られば糸綿の價貴し
 蚊
 ありし成ふれば麦粟魚塩
 の價貴きとあり或は旱とある事
 四十五日あり已ふれば米價貴

く或ひの蚕おしく或ひの雨風多
 く或ひの米実のり又ひ人小病あり
 辛いわされば麻麥の價貴し或
 ひの米大に収る玉ふあされば米麥
 の價貴し突ふあされば米小災
 あり或ひの人民疫病
 を煩ひ又の雨多し
 十二月

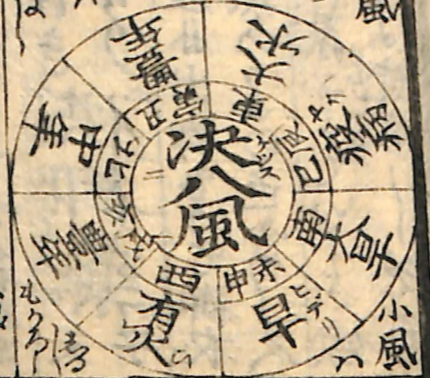
晴雨考

元旦水茶碗小一杯
 杯汲之其目とけ

をさき二日ふも又水茶碗小一杯
 汲之目とけけあるるるんあ
 水元旦ふもさき水よりと
 重き時其月雨おほく輕
 さと死の晴はぐま二日死を
 二月三日死の三月四日めを
 四月と次第くふりて十
 二日かちて見まば十二月
 までの晴まくと雨
 ととあるるあかり

元朝八方の風

を以てその
 年の美惡
 をさき漢書
 出づり
 風はよたれが
 あるもはよ



元日賀

今日を賀まら始り
 本朝ふての神武天皇

の御宇より始る唐土ふての漢
 代世よりとらめてあまをたれ
 日本より四百年をくり後のあまへ

元日異名

註證哥奥ふ
 △三朝

三始三微三元四始元旦
 正日青呂雞旦雞日正朝

淑節詔節嘉時初正初陽
 更始履端天臘上日聖日

改旦歳旦元三年頭初年
 新き年明る年立あ

玉の年年の始
 三の朝日れ始め
 四方拜

元旦の寅の時皇の屬星と
さねて天地四方の山陵と拜し

するの年災と拂ひ宝祿を
祈り申さる事小侍ふるや

清凉殿の東階の前ふて屏風
としそ白木の机よ香花と立

行いふ根原星ととふ年中行

合ふいつ當年の星本命星
をまじり七返げとふのみ事

とといつ今在家の世俗星
佛とて祭るも其まじり人

るるべしとといつ年中行事奇合

光りとのひきき供御薬天

書の御座出御りて御衣
を御生氣のこの色ふり久

させらひて茶子とていふと嫁
せざる小女よ先香し先あ

屠蘇小児ののみ其後銀器

白散をすく免奉る三献ふ度
瘴散をすくすまひふとちり

年中行事茶子みかをむる

屠蘇白散嵯峨天皇の弘

これを行る一人をまじり吞め
を一家病を一家これを吞ぬ

まじり郷病をすくり歳時
記ふりつるいひり道士毎年除夜

み間里みま来りて茶一貼と贈り
紅の袋よ入きて井中いひにさめ

置板元日其袋を水中よりとり
わげ酒ふ和してこれを吞べ瘟疫

を病どととつ屠蘇はつととみ
蘇はつととつとよむ邪氣をか

あつはつちり人の神とよとつ
ととつるの理なり醫家に多く

上み点を加へて屠蘇と書く

ふせ尸の志つづひとよむ字をな

ゆへよ忌避て戸小書くといふ

此某方ふりく十二月の部小あひ

非松の子は冬の末をときまき會月

八神奉

紫府僊人授寶方

新正先許少

屠蘇酒ハ年始ニ先

八神奉

命調金鼎

一氣回春滿絳囊

靈液夜流干

尺井

春風曉入九霞觴

將鳳曆從頭數

日日持杯訪醉

朝拜

朝賀奏賀

元日小群

奏瑞小朝拜

臣天子を

拜し申さる事とるや小朝拜

略儀のて殿上をさるごと

公事 神武帝元年正月朔日柏

根源 原の宮ふ都と立位より即ち道

臣の命等天瑞と奏せらるるよ

起るるや日本記みあり

新集 たりとるやばらうのびて

の系のまのじうもあつたまふ

朝賀 主行事をたよに夢あひと

よびりしれ始のあ代りあり

小朝拜 日とるぎい私さるとや

どりてを枕を紫にまうこそまごふ

非松肥てふふおする

院拜礼

仙洞にも行ひあふ拾芥抄小云院

糸の人々院の御所を拜礼ある

事とる 元日節會

會七曜御曆

氷様腹赤國栖奏こほりの事
と元日奏聞すこほりの奏聞

とだてのり紫震殿あざの渡御わたごよりて
百官の酒となまふあの音ね響ひびか

ひびく神かみのつらり百官ひやくより
あ代あえがきとるれあのま

同初春あはれのたふのりみとのり
のべよとあ代のまあとをく

諸司しよの奏そう

元日節會あの席あふ右
の事あも天子あに

奏そう七曜御曆しちようごにち七曜曆しちようにちとい日月
奉ほうるあ木火土金水の

七曜しちようの事あと書あるあのつ子の曆にち
よりあまを節會あふ奉ほうる事あと

氷こほりの様よう聖あの御代あふ冬氷ふゆこほりの
去年あ氷こほりとよりて室あは納免あくと

節會あのはいてふ奏聞あとるあり
其時氷こほりの薄あさ厚あさを是あれど

石瓦あのあを奉ほうる事あり延喜あ

式あよ氷池風神あの祭ありして氷こほりれふ
と年あの大法秘法あと修あして行あふ

事あわりしあ仁徳天皇あよりあと
まあとあ年あ中行事あ今日あとあるあひ

詞あかきあまる代あとるあ年あとるあの
詞あかきあまる代あとるあ年あとるあの

俳あ時あ淳あく人あ夏あふあ腹赤あはれの
とるあ氷こほりの様よう好道あ腹赤あはれ賛あとるあ云

躰あといふ魚あとるあかあとるあ筑紫あより
奉ほうじと昔あの節會あふあ供あけけるあと

詞あ年あ中行事あ初春あの子代あのあめあの
ああとああはははるあとあかあ我あ君あはあ

國栖あ奏そう應神帝あ芳野あへ行あ
幸あの時あ芳野あの奥あ

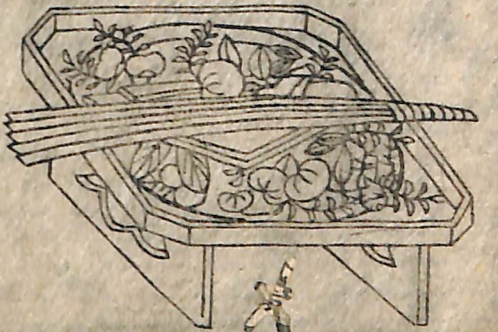
國栖あとるあ象あの者あ奏あとるあ醴酒あを
奉ほうるあ其後あ毎年あ奏あ内あとるあ年あ魚あとるあの

詞あと奉ほうるあ歌あと諷あひあとるあ今あ
奏あ内あとるあ事あはあ今あ國栖あの奏あとるあ歌

詞あ芳野あのあ年あ魚あとるあ國栖あの奏あ
うたひ笛あと吹あひ芳野あより奏あるあ心あに國栖あ

齒固

えがくちめといふて
餅と鏡とて
向ふといへ人の齒
と以て命しする
ゆへ齒の字を
よつひともよむ
よそひをかこ
ひるようあり



高松六本の折敷をとく一の臺
か大根搦とりあちり此餅ハ近江
の火さりの餅を専ら用るる
あはよもて哥小鏡山と寄てよむ
ちり在家の鏡餅ふまどゆぐり
葉とをさ侍るへ清少納言が枕
草紙よゆぐり葉の事といふとて
まことよひのぢつとがめのかは
てはふいた老るま一名と親子草
といふより藏玉集外ありあま
おふものやかぐ美のふとそなまは
かひてぞいあちりまが子とせかみ

うよとれたけちとへ夫木子代まとも教を
とるふとちん
あひておえと親小鏡のりひさる

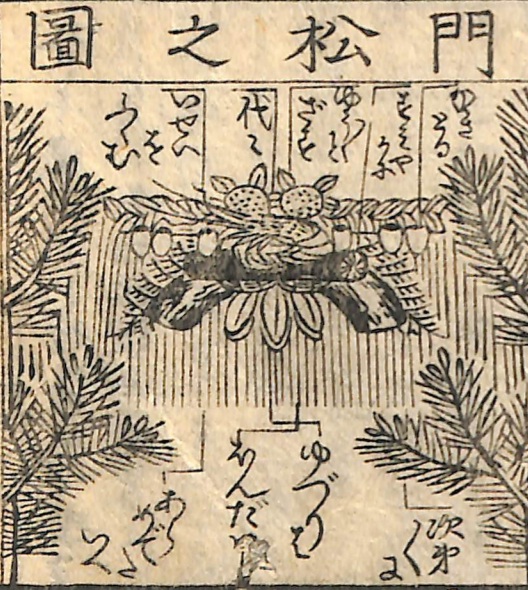
詞 りひのぢえかぐ美餅 齒乃木
ゆぐり葉。うしろ白。大根親よと見葉。

俳 齒固やかひとさむいら長袴 裸虫

狂 子とて花のかえとちり餅ハ
かひりくるとちりりといふん保友

鏡餅 神小供ある餅と鏡の如く丸
くまを故名ぐりりひかたま云

月松 △立松△かざり松△かざり竹
△松のざり△門の竹△門のざり



門松之圖

松の千歳と契り竹の万代と契る
ものゝれは年始の祝ひ用也

一条禅閣の御説き又松の十返
アとて百年に一度花咲ても春也

千年はよひ有とて年の始に用ふ
○新六帖云今松をまきぬるに

たてあてはるるをまきぬるに
詞花の如。民代如。民の戸。注

連。百歳の庭をまきぬるに
路。木のぐくむをむ。魚を松。門を

○能二足るもは松や積く門の松森
門松は物あるまきの奏也

○狂餅つぎは松をまきぬるに
かる家のにも正月の末川 一休和尚

○藁合字
藁は小の番
物と指へ門松をまきぬるに

○饅炭
土中不埋りても久し朽
本草云これを戸内不立す

○邪悪と避るとあれ用ふる人
其角

○注連饅
饅縄△かざりワ
考り合ふとふ 土佐日記
小出

○注連
注連ふらぬく不浄とさふ心
考り○神社は常小志めあさむく

○いふちめとさるるに季ふさむか
さる心と用いさるるに正月の季あり

○能日本の雛形もはや志免さるるに
考りさるるまの門田代移祭也 則重

○大饅
正月かざり物をいさるる
○松。竹。炭。も。縄其外



○婆利賽女の神と元方ふいひ
考り見りら雜煮など供へさるるに

○能の徳へ四方の歳や引出良徳
考り方多物とあさむかす

狂 東方より移るる早くを節月
ととく神の内に入らぬ枝

門の神棚 在家の妻戸の棚を
かまへて祭る夜の土

器小灯さざぐるま
え侍る事あり 蓬菜いふ

蓬菜島に仙人の住處にて此處の
菓物と喰へば不老不死に至ると依て

年始は命遠くと祝ひて三方の種々
の物をつも重ね蓬菜と名づも祝ふ

○非 蓬菜やまはし海とやぬ 可友
○圖 とも外諸礼 家本式の通り



蓬菜の圖

狂 仙家のいれりよのうまきこまうちほい
蓬菜庭に春あけの朧月山人

△蓬菜 三方の臺のあり
たる所と正面とひる

△橙 実とむまの七八年かち
代々つく故祝ひの物とん △穂俵 ちんちん

△搗栗 搗の字と勝小くへて方事
かちちくる心まていふ △みめん

△梅干 梅宝珠といふ △榎 ちんちん
玉の心まていふ △櫃 ちんちん

△柑子 △ころかさ △昆布 乃
右の品々かざり心とよむうかざるといふ

△抽 △野老 △海老 △橘 △串柳
春ふて元日の季なり 右乃内委
由來のありのり次ふりくまう

狂 みるるはたのくところの名
をそとせむいそじちとせむいそじち

食積 蓬菜の餅はふつう如く目
出度りの故蓬菜の積かさ

狂 初まを移るる蓬菜とんびり
まのひるひるひるひるひる

海老野老

二品とも老の字とあやうり用るる

殊小海老の腰のむらみらるるのみよりよひ長く腰のむらみらるる

長命めで老人事と祈るの祝ふ非いせむの傍りもゆし神の壽親重

神馬藻

神功皇后異国とせりぬらぬ船中馬秣は

よつて海中の藻と取て馬の牧也神馬草と名づく名はよりて羊徳

神の馬小よそてこれを傍りたり又和訓小穂俵といふを以て穂も

俵もめてこれ物なればまきと用ゆるるるべし民俗なまりてやんご

りつとつ非やんごや橘冬も緑祝儀表とるるま禁橘ふりて

変らず其実赤さめらるるゆへ祝ひの物とすむり諸兄公始て

橘の姓と賜ふもこれを祝して之非橘はらまよまの傍りも安正

齒朶

裏白 齒のよひとよみ朶山ささ いえごとよひよひ

長くえごとのづるといふ意とて是と用るる其上齒朶は雪霜ふも春

まきど青きめらるる杖親子草の春の祝ひ用るる杖ふらひ草

代々と讓り子孫長く繁栄の儀とよりて橙杖と並べ用るる代々あら

るるその其内か死よる意味あり死の字とて人の忌思ふべきを

ども常とありて人驚く事あり唐小かりるる斬有十畳の座敷

を建つるに折節天台の淨慈寺に書記濟顛といふ僧の通るる

せし主人のよそ今日家移りてせば吉事の祝詞とて玉のつと

諱ふ濟顛よりあへど大音ふ云く子有て親死し夫死して婦死せ

此家より千口の葬と出るるとよそ走つて出らるる主人甚ど怒

つて新宅の祝詞とよむふ却て死
をいの葬といふ追ひて一棒と與
来まじと僕も命す其中に老人有
て申したるこれ大ふ吉語なり必
怒りあふべし後子有て死せば子孫
を絶ト夫死して後婦死せんこれ
順道なりこの十疊の座敷よ
り千人の葬と出さんといくは
これ年数を歴どんばあまふ事
にあらざるは目出度語いあら
ばうらびといふと死主人大小こ
うして濟顛ハ凡僧ハあらざる
事とありますく尊びけるや
るやまじとありて世間の物忌
まるあまふ中なる

秀 新撰六帖

有家

春こころにさしかるぬゆづら
ゆ川ふとれたも若くは免とぞ
非 ゆづらさやひか小
家の大りなり 親重

雑煮 冬年に製し置る餅は
種々の品を加て羹として

喰ふは其品國々家々の嘉例
アそ大同小異ありその加ふ品と左記

芋頭 大根 芋 子焼豆腐 かつ栗
昆布 ありい 煎海草 さらめ とうき

非 牛房 ありい 糠 糠 田はくり
餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅

狂 儀 ありい 新煮とるぬ人ハ
膝のともはる春とある人ハ

羹 羹ハ雑々調へ煮るあり
の依云即雑煮の事

祝と云 結昆布祝
元日あり 云々を正月祝

芋頭 万事の司頭なる心して祝へ
又頭といふ字ハ大学頭藏

人頭をぐるめあり人乃名
よふゆ元日は祝ふるを

料 兩のものと書之年始に
遺小カシメのなる

大箸

△美箸と云 おきごうりやうふ
年始の箸ハゆくと用事

開小豆

豆と水煮めて大根と
酢とていあて雑煮

祝ふかてりいといとくると云開
といふいといのあてりい

開牛房

豆と同一心入開いて血
ふりりい名つるふり

加賀御州

大内ふて餅の上
とく大根をいかり

素 茶の中にも子さかみま
やがてりいぎふそあえはる

鯨飾

子孫繁昌ハトとて祝する
数のふて三真徳ハ光嘉

押鮎

鮎ハ異名年魚といふ押鮎ハ
塩のもて年始用事

倭海鼠

とくごとも
生海鼠

とくごとも申こると余多あり
非たつごとも鯨のころの枝

小殿原

△田作とも云。こはめ
いかりれ事あり

海羸

海中で生きる海蝨の身
こ元日の祝儀といふ

螺肴

夏とも多く出るものハ
非たつごとも文鱗

掛鯛

元日かかすどのうへは
干鯛兩尾とくける

とり朝

元日かきよめて喰ふ
國ホよりとい其例一

葩煎賣

昔い元日かえせと
家内かき故る

羊男

年越の豆とまくの正月の
儀式といはむと云。又其

羊の十二支ふあつるもいかり
非たつごとも男 彈流

大服

煎茶の名之服の字忌服
の服乃字と不吉い元

日小立一茶と大福とせと祝
非たつごとも宗敬

狂者本れりさるる青木の葉を以て
初の大みくろの如きみくろの 入安

若水 △洗盆井 △華水 △若水桶
△初手水 △井開 乃事あり

公事小立春ふるむ水とていさう
連能小元朝くむ水をいさう

連 くはまも裏より水たるといふ玄仍
俳 まのいむく星の砂子 冬門

福藁 △福藁敷くはの庭あり
とま物と喰ふ 淨ま心

庭竈 民家庭のしとま新
しとまはまをいさう

俳 なまも本も靴黄とていさう晋子
福鍋 福まとい名のあたまきあり
て年始の祝詞あり

幸木 △幸竹籠 木の小枝と折て夫よ
魚鳥菜菓とてい

て竈の上とていさうとていさう木とていさう
はらう今とていさう事とていさうとていさう

鬼打木 大賀王の木ともいふ
門松の影に木あり

年木とて正月始り疵多木と
とて末小葉と残り門をさうけて

おおく鬼打もいさう木とていさういさう
とて陰氣とていさうの義あり

毘沙門功德經 多門天と
いふ福の神

あり昔陰陽師のまがう民家
來り札と納め御經とていさう跡に目

出度とていさう若戎 元朝小
きとて今絶え 賣あり

くと買おさえて祝ひ祭るあり
俳 とていさう年たぐりまます右松

狂的羊たけのまうらん一師を
えぬやれをまがうハ神魚 星雪

ゆる糸がうらう 星佛 其年の属
多のすう春房 星九曜星

の像を星佛といさう 懸想文

舞の十三十八丁とていさう 懸想文

賣

懸想文といふ元日寅の刻より町々と賣て通る赤と

袴立烏帽子とありくは是よ

銭とありはまの女は多しのめで

つくわえしといひて皆祝して

洗柔とありくはるる今とて

かへちまきう文の縁はきの早く

あふべきやうに祈る陰陽師乃

祝文をりされ元来の艶書のこと

非人のいれを多といふはけさう文

狂いふるといふ後いししくと

狗の下もたけさうまは貞徳

初雞 元朝のとうれ声なり 非一

初雞 若手身よりそそ声 望一

稲積 いねと稲いりて積れた

元日の寝ると云。一説三日とも云

非 移種や秋のち桑と花の春子周

稲あぞ 稲つむと同心なれとあ

ざとくは故と心多るに

初夢 大晦日夜より元日あ

つさふいりて夢と

三物連歌 元日宗匠の家

旗これとりてあ

そへ者或の弟子集り句とあ

第一句と祭句といひ第二句と

脇といひ第三句と第三と

いふ三ツあはるるゆへ三ツ物

といひ是と板木ふありて

市中と賣らる事あり今と

うは事なりといふも宗匠

の家小例歳の式とありて句

と作るあり△裏白連歌れを

連歌の四枚の懐紙ある中

古あやまりて片面と書脱し

又一枚と添て五枚とあせり

夫木 西行

年金おぬ春米べとあおひ孫の

まさしくとえてかやあはの若

非 初夏や丁固が例と松がきり少蝶

三物連歌 元日宗匠の家

旗これとりてあ

そへ者或の弟子集り句とあ

第一句と祭句といひ第二句と

脇といひ第三句と第三と

いふ三ツあはるるゆへ三ツ物

といひ是と板木ふありて

市中と賣らる事あり今と

うは事なりといふも宗匠

の家小例歳の式とありて句

そのゆへは片面白紙なり
是と例とてかく名付たり

三物誹諧 右連歌小同ト又
裏白俳諧も有

元日異名註 正月朔日と
元日といふ

元といふ字もト免とすむゆへ
せどめれ日といふ事△元三
といふ事ハ年月日のせどめと
いふこと△四始といふ年月日
時の始といふ事なり△履端と
いふ履いふむといふ字端ハは
じめといふ字義あり春ハ四時の
初めゆへもト免とすむといふ
事にて元日と履端といふ新
玉乃年といふ改年といふ
るべし万葉ハ荒玉の年せ
あり玉といふるのいたかた
内かれば年のせど免不祝
ひありかくといふるべし

元日 歌連 俳狂 哥詩 手紙
故事 いろくゞん

⑤夫木 俊成
九年やましく危ふしうさねの
そでとつらわらふ代の初なる

新撰六帖 光俊
今初まればうさねおともあぐすり衣
なるたちそむらねのまの風

家集 元日聞鶯 西行
志めりけてまゝなる者の松ふきそ
まの戸あふふ考乃しそ

夫木 為家
年の内ふまのましとわら玉の
とどめとらふのかとむそくは

六百番哥合 慈鎮
百あやまねむらうさるさうのまに
さみらふとせの初そつまる

拾遺集 赤人
きのふそをひのけり けまらぬ
ちしゆくふよまやまよまたり

三朝 道遙院
互かふるまのたふとやまらげ代の
月日れそト免ちのけり

詠子代たをどめ。年成とある。春のそよぎ。朝日
 づげ。天の戸あくる。あくる年の
 春来る。いふ多く。あはれまじく。
 愛ものどろふ。いふ多く。あはれまじく。
 ひととそよふ。まはれまじく。あはれまじく。
 代のそよふ。君が代禊けこのま。
 年のま。四方はま。このあはれま。
 年。ま。あはれま。あはれま。あはれま。
 連中ま。あはれま。あはれま。あはれま。
 響は声や群山のく。乃春冒休
 去のま。ま。あはれま。あはれま。あはれま。
 果ある神代あはれま。あはれま。あはれま。
 分りて書はま。井のま。あはれま。あはれま。
 非えおや神代あはれま。あはれま。あはれま。
 干徳やけま。あはれま。あはれま。あはれま。
 善の目ま。あはれま。あはれま。あはれま。
 朝夕の人もあはれま。あはれま。あはれま。
 元日に回あはれま。あはれま。あはれま。
 誰かがあはれま。あはれま。あはれま。

元日詩 五字對句

同上

百靈滋景祚 花柳三春節
ヒマクレイミレタイツヲ ソハリウ シノセツ
タミケサ サイハイ

萬土慶維新 江山四望雲
ハントケイスイレンシラ コウサンシバウソクモ
クニツト ハツバル

元日詩 七字對句

詩礎

春歸鳳沼恩波暖 日月光
ハルカヘツテホウセウニオンハアタカニ ヒツダツノヒカリ
ニ ハル

曉入宛行瑞氣寒 建寅春
ウカッキイツテエンカウニズイキサムレ ケンインノハル
ニ ハル

花堂翠幕春風至 萬國同
クハドウスイバクレンフウイタリ バンコクオナニ
クハレナイナザレキ クニク

繡閣金屏曙色開 繞黃圖
シウカクキンペイシヨシヨクヒラク ダルクハウトラ
ケツカウナヤレキ ニ キンリ

元日詞

張說

元日今歲樂 今年ハトリワキ
ハレニシツコンサハレム コトニハトリワキ

樂不謝往年春 去年ノ春ノ
ハレニシツコンサハレム コトニハトリワキ

誰為昨夜人 人情今朝
ウニア コトニハトリワキ

誰為昨夜人 人情今朝
ウニア コトニハトリワキ

昨夜ニハ似
サルトナリ

詩 元日詞

蜀地寒猶

外地ノ中デ蜀ハ寒
氣余所ヨリ暖カナリ
正朝發早

梅 都ハ巳ニ梅花発ケバ
偏驚万里

客 コレヲ見テ蜀其外
已復一年

來 春ノ早ク至ル今又一
張說

詩 元日詞

元日賜群臣栢葉
唐ノ制ニ

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ
武平

歳時記ニアリ栢ハ仙菜ナリ
武平

綠葉迎春新
栢葉ノミドリモ春

寒椒歷歳寒
冬ヲスギ来リテ

願持栢葉壽
仙菜タル栢葉ニ

長奉万年歡
恩賜ノ栢葉ヲ捧

奉和正日臨朝應詔
天子朝廷ニ

製ノ詩ヲ和セヨトノ
詔命ニ應スルナリ
揚師道

詩 元日詞

右ニ同

居間無賓客
起只如常
地間

住居スバ春ナリトテ賀シ
来ル賓客

ホリ 桃板隨人換
桃符ノ製モ人ニ

タコハ 梅花隔年香
年ノ内ヨリ発

春風回笑語
雲氣ト豊荒
和

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ
祥 栢酒

勞勸心平
壽自長
心中平和ニ

ハ寿命自然ニ長久ナラン
仙菜ノ栢酒ナリト

詩 新歲戲作 室鳩巢

莫笑腐儒生計貧
儒者ハスギラ

貧シトアサケリ
今朝富貴而迎

新 中々貧賤ニハナレ
牀頭千卷人

間 樂瓶裏一枝天下春
牀ノ上ニ

一枝アリテ此上ノ樂ナシ
瓶ニイケレ梅

一枝ハ天下ノ春ヲ迎エ
富貴至極トスレ

詩 壬午新年 同 龍州蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生雪ハ

ミレバ庭前ノ柳シゲリ絲ヲタルハ

葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ

ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲セシ

鵲ノ声ノヨロコビシク啼ヲキケバカ子テ

年始ヲ賀シ来ル珍客アラシコトヲ知

ルトナリ

狀賀新年之文 片カナ尺牘

表陽之清有也セシヨウノ 体初キミ 納ナ

新 トニ 鳳紀之慶ケイ

先マ 知チ 貴キ 眷ケン

健 履 正 且タニ

深フカ 為ナ 喜キ 盛セイ 戸ロ 中チウ 無ナク

余任遲一日不勝九頓

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

賀一辭

上 慶捧半箋 寄賀辞 中 不勝相

祝 上 聊此由賀 上 為以祝壽之

證 上 任遲日 上 他日期春遊 中 須

約 上 尋芳日 不勝九頌 中 臨措快

々 上 呵硯皇恐 上 拜替首 中 頌

首 中 不備 上 誠恐誠惶 上 死罪々々

狀 新年之文返事 在漢文尺牘ニ

為 二年南之伍 祝詞

早 辱 誨 章 賀

新考札亦お見仕い此作

三 朝

於此交目お度下 認公先公

万 壽 更 任 命 記得

貴 府 門 庭 各 佳 健

長 涉 跡 家 内 志 込 込 込 込

多 一 慶 頻 至 將 俟

永 陽 對 人 志 倍 倍 々

三 春 之 行 樂 謹 此 伏 候

早 辱 中 速 得 賜 書 上 伏 兼 中

兼 札 示 上 辱 枉 上 已 蒙 誨 章

上 教 示 中 來 書 中 珍 贖 中 家 健

三 朝 上 履 端 中 淑 節 任 命 中 若

論 上 蒙 命 貴 府 上 仙 縣 上 錦 里

中 邦 鄉 門 庭 中 邸 第 上 滄 家 上 黃 堂

或 人 の 説 々 年 始 狀 の 結 語 々 期 永

日 之 時 候 亦 々 々 期 永 陽 之 時 候

と 世 間 普 通 々 書 來 々 々 期 永

日 候 々 々 々 濟 々 々 之 時

の 二 字 重 言 の 々 々 々 々 々

侍 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

①新年自作詩哥と送る文

新曆吉兆可也ましまさき きまつく 休まひら 今いま 朔しつ

甫歲上休兆ホサイホウキウチウ 朝来チウライ

尙なほ 枝えだ 始はじめ 与よ 昇のぼ 堂どう 吉きち 兆ちウ 折お 栢くわ

鸞ワウ 花クハ 競キョウ 妍ケン 偶ク

首み 風かぜ 一ひと 之の 試し 毫ご 仕し 以も 付つ 以も 然ぜん 涉しゃ

寄キ 鄙ヒ 詞シ 以テ 投ト 几キ 下カ

月ツキ 以も 互たがひ 交まじ 以も 係か 削く 下した 希まれ 以も 不な 乞げ

拜ハイ 乞コ 慈ジ 芥カイ

甫ホ 歲サイ 上ホウ 鳳レ 曆キ 中サン 三シ 春ン 卜ウ 吉キ 兆チウ 中チウ

令レ 辰チン 上ウ 嘉カ 令レ 朝チウ 来ライ 今イマ 辰チン 發ハツ 起キ

鶯ワウ 花クハ 云クモ 黃ワウ 鸚キウ 繞ニウ 芳ホウ 樹キウ 梅バイ 鶯ワウ 映キウ 朝チウ 暉キウ

偶ク 強キウ 于ヨ 時ジ 卽キツ 偶ク 然ゼン 寄キ 作サ 賦フ

述シツ 鄙ヒ 詞シ 詞シ 章ヤウ 一ヒツ 絕キツ 鄙ヒ 語コ 野ヤ 詩シ

投ト 呈テイ 汚ス 奉ホウ 告ツク 几キ 下カ 上チウ 閣カク

下カ 中チウ 座サ 右ユウ 中チウ 顧コ 盼ケン 拜ハイ 上ウ 恭キウ 上チウ

謹キン 中チウ 敢カン 中チウ 以モ 慈ジ 芥カイ 潤ジュン 色シキ 斤キン

正セイ 請コフ 正セイ 不フ 律リツ 不フ 具グ 草サウ 不フ 宣セン 不フ 悉シツ

① 同返事

涉セツ 祝シツ 羽ウ 玉ギョク 交カウ 和ワ 存ソン 人ジン

朵ダ 雲ウン 辱カ 辱カ 嘉カ 辭ジ

仕シ 以モ 何ナニ 乃ナニ 後ノチ 新シン 嘗シヤウ 梅バイ 花クハ

鶯ワウ 花クハ 乘セウ 乘セウ

孫ソン 長チヤウ 閑カン 依イ 采サイ 文ブン 以モ 什シツ 以モ 什シツ

春シュン 光クワウ 遲チ 々タタニ 寄キ 中チウ 卽キツ

興キウ 趣シュ

事ジ 之シ 詩シ 章ヤウ

感カン 賞シヤウ 之シ 以モ 半ハン 不フ 淺セン 納ナツ 盡ジン

不フ 減ケン 古コ 人ジン 暫シヤウ 留リウ 之シ 干カン

ヤ作望

案上ニアル

朶雲尺素 尺書 辱命 抵命

嘉辞 壽儀 祝詩 壽章 鶯花

云々 花開 鶯嬌 景悠然 黃鳥日

轉白梅風綻 辱被投 賜寄

即事 即與 對景 任與 乘感

興趣 風調 雅音 不減 古人 不讓

暫留 敢作家珍 拜置 干座 納賞 重

右手紙 〆も 〆も 〆も 〆も 〆も

てわりこの真字の漢文を次

内ノ文章とぬき出し書替又ハ

異名あり上中下のあ

方同輩 目下の書ハ

あつと上中下ハ

一見合しと書屋

歳旦 畫雞 鮑宣ガ傳云鶏ヲ畫テ 戸上ニ貼リ符ヲサシ

ハサメバ百鬼オソル其上ニ葦ノ索ヲカケル之故ニ葦索トモ云フナリ

仙木 桃符 桃板 桃梗 皆同ニ 桃ノ木ヲケツリ符ヲカキ

テコレヲ仙木ト云フ百鬼恐ル所ナリ是ヲ元日ニ立テ邪氣ヲ

フセグナリ桃板ニ書法士民并ニ儒者僧家とて書べき文皆

日本歳時記 五辛盤 生菜 春盤

ナドモ又菜盤トモ云フ松栢椒花菜根芹等ノ生菜餅ナドヲ

盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云本草綱目ニ葱蒜蓼蒿芥是

ヲ盛饌ヲ五辛盤トイフ迎新ノ儀ヲ取ルニ 如願

商人清湖君ニ女ヲ乞ヒ得タリ 商人欲キモノ有テ求レバ此女ナ

ニ、ヨラス興ヘスト云フコナシ依
テ其名ヲ如願トヨブ常ニカシ
如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲ
ク起キ出シヲ商人怒リテ追打
シニ糞壤ノ中ヘニゲハリテ其跡
カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ
ケテ糞ノ中ヘナゲイレ令
如願ト云フコナシケルトゾ
椒栢酒

△椒酒△椒觴ナド云フ椒ハ玉衡星ノ
精ナリ是ヲ服スル屠蘇酒ヲ
モチユル
東海ノ
度朔山
ニヒトシ

神茶樹爵壘
ニ挑ノ樹アリ大キサ三千里東
北ニ二神アリ神茶樹爵壘トイフ

ユノ神百鬼ヲクラフトナリコレニヨ
ツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセ
コレ本朝鬼門
放生雀
邯鄲
ノ據トスルニヤ
ヨリ

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ献スカ
ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

祈穀
漢ノ武帝ニ始ル天子五
穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ル

ナ
粉苜枝
米ノ粉ヲモツテ苜
枝ノカタチヲツクリ

食スル
折七松
歳ノ始ニ松ノ枝ヲ折
ル男ハ七ツ女ハ二ツ
ナリ

茶トシテ是ヲ吞
ベシト薫勒ニテリ
鐘馗
唐ノ明皇
ノ夢ニ小

鬼来リテ明白玉ノ玉笛ヲヌスム
明白皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント
スルニカ心チ一人終南山ノ進士鐘
馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラ

ヘテ食ヒ殺シケルト御覽アリテ
明皇ノ御夢サメテ翌日御腦頭

ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗カ
像ヲ画キ又人鐘馗ノ貞ニナリ

テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト
ナリ此事唐ニモ久シク言傳フレ

ドモ附會ノ説ナリ委女シク日本
歳時記ニ論不見ル正説ナリ

元日妙術

除年中病去冬 山椒をほだき置

今朝丑の時より前赤小豆七粒と右の酒ふて吞べし年中病ふし

除邪氣

今日蒼木を焼ば羊中の邪氣を除く或い煎湯として

吞もよし

不老法

今日枸杞を湯ふ入てゆあそすれば人として光

澤あらしめ病む老ず

治膈氣

今日小便を以て膈氣を洗へむ右

瘧疫と辟く

麻の実七粒赤小豆七粒井の中へひるまば病難と除く

樹木

今日鷄鳴の比火をとりてして樹木を見るべし此時は

いまで虫ありとくも腐つる枝葉のありまうする所あり是

と取去るべし虫生ぜざる也○又元且五更の時早く芥と持て菓

此木を叩き或ひは切る斯のごとくすれば其年菓実を結ぶ多し

○鷄鳴のとれ松明ふ火を添し木の上下とてしせば虫くまらざり

元日寺社

京

祇園削掛の神事元朝寅の 天をたのめ火をうけよ参詣の人おびとく一説は大海日の夜とく○般舟院元三大師乃いへる非あり

画像開帳○六條道場天神自画の像開帳○仁和寺北野兩所午王

加持○比叡山東塔の修正會但 元日より四日まをり横川西塔八日まをり

大坂

天王寺講堂秘密供寅の 宝藏の朝拜辰の 太子堂の法

事舞楽巳の 金堂の万石米酉の 六時堂の重盞酉の 修正音楽酉の

初春之部

日の定まらば初上元日よりなり

旬の季乃りの此はどふ出まを歳旦とくまふありのなり

若餅

三ヶ日の内又ハ初春ふつ三ヶ日をもちをよめ一説は

小の餅と若餅と云小は字と忌故之雑法抄出

⑩ 非 若餅の如く子くつさひなり 元辰

破魔弓 破魔矢 破魔弓

とぬやとりらしてたまを射てたぐひふ勝負をあはれそよむじくはあり

弓のまのびるるべし弓の不祥と

ちりふみのと神道とい采物の中に用也哥あり白虎通ふ云

天子まろくろを射て陽氣をたどけ万物小達とるとあり

⑩ 非 ちぬ弓や通ぬわう四天王 其角

羽子板 胡木の子といつと まろくろなり秋のまどめ 蜻蛉

といふ虫の蚊を食ふめなりその形をまひて板のせつと上とま

あつる時蜻蛉のまろくと 世間同答よ

⑩ 詞 ちり羽子△胡鬼の子△胡鬼板△ほの

△ちり糸つと 右がまも羽子板のことと 哥の言葉ニ用ゆあり

⑩ 非 羽子板や箸なり 毬打 △玉打

外のちりぬ潮照 板と玉の如くあり是とつて

△ちりぐ玉△ぬぐぐ。毬打ハ厚さ

遊ぶ子供のみてあなび物への唐土 黄帝と云人虫尤といふ人と亡くあり

外虫尤の災疫神とまて人民とあや 初ふぎちりやとまろくろや。本朝

昔の年始ふ上つるふともしわをむく 故日本紀ふも出たり。万葉集は

玉きりるといふちりやこれと 雑法抄 出たり

⑩ 非 ちりぐ玉と打物之 毬杖といふ

宝引 △福引とも云 宝引ふ 蝸牛此角とぬく之其角

年玉 早春ふ食物とあると云 非 筆 試筆 筆試 初といふ日あり

元日こまじの古例あり王羲之わうぎし之書
初はつの月義書ぎしよあり 王羲之

日ヒ往ユキ月ツキ來キ元ゲン正シユ首シユ祚ソク
きよ年ねんのことこひハはりてしやう月げつなる

太タイ簇ソク告ツケ辰チン微エイ陽ヤウ始シ布フ
正月のことりしやう

鰲アヲ魚イシ不フ宜イ和ワ神シン養ヤウ素ソ
あらはしことりハらるものどろろナリ

詩カキ書シヨ初ハツ世間小書せけんせうしよあり

天テン筆ヒツ和ワ合カフ樂ラク地ヂ福フク皆カイ圓エン滿マン
てんりつがあつてうくくくニうりあり

詩テウ長セイ生テイ殿テン裏リ春シュン秋シュウ富フ不フ老ラウ前ゼン日ジツ月ゲツ遲シ
いくなびもろもあらることりハらるものどろろナリ

詩カニ佳セイ辰チン令レイ月ゲツ歡カン無ム極キョク萬マン歲サイ千セン秋シュウ樂ラク未ミ央ヤウ
よしのつと月げつれいせいとりハらるものどろろナリ

詩ヤウ陽ヤウ和ワ入ニ大ダイ厦シャ梅バイ萼ガク出イ枝シ條ジョウ
ことりハらるものどろろナリ

詩カハ梅バイ自ジ發ハツ南ナン面メン香カウ猶ハナ到トウ東トウ簾レン
かのとりハらるものどろろナリ

詩ワウ黃ワウ金コン自ジ充チュウ夕シヨク朱シュ提テイ忽コク納ナツ朝チヨウ
あらはしことりハらるものどろろナリ

詩カイ海カイ内ナイ太タイ平ヘイ日ジツ扶フ桑サウ安アン靜セイ時ジツ
あらはしことりハらるものどろろナリ

書カキ初ハツのこと

新古今

費之

君キミの代しろの年としの數かずと白しろお乃の

非ヒ也ヤ和ワ前ゼン紙シのゆ色いろ友とも声こゑ

梅ウメ路ロ香カウ猶ハナ到トウ東トウ簾レン

天テン筆ヒツ和ワ合カフ樂ラク地ヂ福フク皆カイ圓エン滿マン

狂キヤウ八十はちじゅうのと券けんとかてて 廉卿

去年こぞ今年ことし

右ミダリのと山やま元もと日ひより年とし始はじのこ心こゝろへ

非ヒ花はなのと去こ年ぞ今こと年し

頃ころ始はじよりとやあれどくく

世よよりと童どう女にょのともとあらはし

球たまご法はふ々々年としのは初はつ小こ幼よう女にょ乃の

頃ころ始はじよりとやあれどくく

世よよりと童どう女にょのともとあらはし

狂（非）礼小名てはきよとつひのきよとく
らふ扱へあむむれうの子が貞柳

鳥追（鳥追）踏哥の遺風うり参河よ
数千町の田畝と持つ長者の

て田園の鳥と追ふはよめむらう
かてこの長者くふ養りく者数

人わりこふよりて長者の事を祝
して年の始ふ諷やうる哥さう○せ

んぢよやまんぢよの鳥追とつひを
千町万町も鳥と追ふべしとさうり

御長者の御内へおとすのこねわろ
右大臣左大臣関白殿の鳥追の高

追ふれくとこめいぢよとせんぢよいぢ
たもよせんぢよをさうとさうり

香追のあやう大黒舞（大黒舞）志内か
つる春は門風鈴軒（風鈴軒）民の問ふ

来て目出度哥とこい舞と喧と嬉
内は其頭は錢と手合せのれと取不來云

非（非）ちよと寄て（ちよと寄て）諷初（諷初）松柏子松
浪さうやまね郷（浪さうやまね郷）囉子松謡

非（非）律代の民や肢軟うつ悩初如貞
狂（狂）狂とかもシテワキ小せんる砂の

松さうすり友（松さうすり友）万春樂春（万春樂春）
おもさうらう頼智

鶯囀（鶯囀）梅が枝諷小青柳（梅が枝諷小青柳）

諷（諷）是は皆催馬糸の諷小物の名
之催馬糸禁中うこい物の名

乗初（乗初）輿乗（輿乗）舟乗初（舟乗初）船玉（船玉）
祭（祭）祭（祭）

舟乗初小賽とニツカざりごとく故
実ありその並べるや上へ一とニツ

並ぶ一天日和れアうふと祝
てうり左まねが下へうり方ハ六地

真直めで水上おどるうらん
とこニとニとを合す中荷多か

らんとの向ふハ三とさうぶさ
うー前ハ四とさうぶ仕合うーと

祝小事とるや（非）宗和マ節（宗和マ節）
え方へる守楫のきさう

朝節夕節親戚宴會をさして

節振舞と云ぬぐい往来するを

新春の賀節を祝するに尤令節

毎に祝ひ祝ふ事年始のころ限ら

ざとどど正月の一年の始めなる

火をとりて格別よ節といふ正月

の事とす祭といふ葵祭り花と

いへば櫻の事とするが如し

狂沙みどり系より小朝焼りのく

節小袖（非）沙毛さら正月さ

狂（狂）乃のこころをいふおまが小袖

くも苦みせすは深衣 正信

椀飯 東鑑よ云く今日千葉之

當月武家の節といふなり

（状）節振舞ふ招く文左ハ漢文尺牘

抄抄 考々 考々 考々

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

舞初。四辻家不樂初あり

正月十七日禁中了

朝節夕節親戚宴會をさして

節振舞と云ぬぐい往来するを

新春の賀節を祝するに尤令節

毎に祝ひ祝ふ事年始のころ限ら

ざとどど正月の一年の始めなる

火をとりて格別よ節といふ正月

の事とす祭といふ葵祭り花と

いへば櫻の事とするが如し

狂沙みどり系より小朝焼りのく

節小袖（非）沙毛さら正月さ

狂（狂）乃のこころをいふおまが小袖

くも苦みせすは深衣 正信

椀飯 東鑑よ云く今日千葉之

當月武家の節といふなり

（状）節振舞ふ招く文左ハ漢文尺牘

抄抄 考々 考々 考々

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

抄 考 考 考

舞初。四辻家不樂初あり

正月十七日禁中了

御舞初あり舞初ハ能初ハ
あり舞樂のより先あり

御慶 年始の祝ひの言葉
ありおんよろこびあり

履新慶 ぬりさうかへく
新しきとあり云

事へありつゝつゝと
いふ心あり。年始人と賀する詞

淑氣 初春小立春一氣あり
年始の言葉あり

歳旦句の祝 歳旦の字義は
のありとあり

つゝとよむ瑯琊代醉扁ふも出
く旦の字ハ日出一上といふ字

義ハ歳旦の句ハ年始賀詞の
とよむへ一近年ハ正月月中旬までの

氣の物と歳旦と心得る間違
あるべしハ歳旦の句ハ手きん

りのあり忌詞多し少しは
不吉の詞ハよむるべし

上子日

初子日

△子日遊 △小松引
△子日松 △初子日

の玉簾のひうの子の日野辺は出
て小松といふ遊ひありあり

人皇六十代朱雀院の頃より初
とや北野紫野へ行幸ありて

小松といふ此日と祝ひる事ハ
公直根元といふ各不出る子の日

小松といふ給ひといふ子日方角
ハ北方ハ北州の千年の壽とあり

とあり。○松も千年の壽あり目出
度との故松と引へ小松ハ千

年の壽ありうふ行末栄も
る心とありみ目出度ハの故

あり。○玉簾の更ハ次
委しとあり

○今日泰山府君の祭りの日あり

哥 新古今 俊成

さう波や志望の淡松より不
雅が世にひきり子日あり

夫木

同

かまひきゆにれねむりて
君をといふまのの小松を

文治百首

定家

何ゆゑふゆ子のくみれ小松を
まのまゆめを繋りてめけん

夫木 兼待子日

寂蓮

ふとせゆん子れ日の友をねめても
松のえりきたるくちりたり

家集 社頭子日

清輔

松をいふ神のまじろけ子日よ
さう本代子代のたけよせん

續古 雪中子日 土御門

あらしのまよふかゆべの小松系
引ひねねりきまをくはく

久安百首

隆季

あらしのまよふかゆべの小松系
あらしの丸をふまをこころ

詞引引をあるまの神ををみり
みづりふ子世のまこりる二系ね

山の松。○山

山の小松を引野

庭 松を引をあるまの雷

友 松を引をあるまの子

春の月。子とせと繋る。ね末遠

春の月。小松のつとけ枝を

連 朝らる枝や子世の小松系

俳 春は白い大あぶりと子れ日

狂 女まのまぶ子の目け友ふりて

詩 倚松根以摩腰 千年之翠滿

手折梅花挿頭 二月之雪落衣

梅ヲタリリヲカサニニスバ雪ノフルヤウナク

玉簪

たまたぐさめざのふ草ふ小松とさう
そくて家とそれとじつと

をいふ。俊成卿の口傳小田舎母
かひとつかととさうふ初春子の景

箒に松をゆいさうてこういさうと
掃くとさう玉といちちさうる詞さう

蚕を飼ふ家
の祝儀さう

子日衣

こひしふ乃日小
服と名づく

△梅の花衣△鶯衣△柳の衣のいろこ
△鶯袖うぐいすさうらつせの衣の袖さう

若菜

△千代名州ちよひなしゅう
△磯若菜いそわかしゅう

△初若菜。七種若菜。十二種の若
菜あり。七種のしつけつごかちん

昔子の日ふつこさう中世より七日
誹詩小別しと七日の古夏ふさう若

菜といふ夏七日の外五十七日小
貫之

春日けくお菜搦や白ぬの
袖さうさうて人のゆいん

家集

好忠

さうまもさあらんやとまをそ
さうれつじびさをさうらさうのふ

夫木 雪中若菜 仲正
さうつくのあなとつじとあさるま

中系乃雪いじつはみさう
夫木 独摘若菜 仲正

詠子あくまのさけけくおあま
袖さうも人をさそさうさうらさう

御集 朝若菜 後京極攝政
於人さのたれのとさうし中ふ

物あささういおあ菜とぞつじ
万葉 若菜 赤人

あはさうい若菜つまんとさうし中ふ
さうのふもさうと雪はさうらつ

夫木 山家若菜 兼盛
あひびさのさうさうらつあ居よ

先人され母さうあをそはさ
千首 水辺若菜 同

あはさのさけさうらつああ
つまぬぬさうてあささうらつ

詞つじあさ。下巻○海邊のさ
磯菜つじ。淡菜つじ。野のたさ

雪ふるればさか。此もさきふよつじ。
 次 汲田城なる地原のころふ。根芥つじ。
 すくぐ根芥。垣根垣ひはさき。垣ひ
 のきりもて指垣ひのころ。田圃
 はさき。小圃のころふ。根芥。雪あ
 るのさき。氷（おろし）はさきよとせてうちまひ
 るのさき。七葉の如人（おろし）野芥（おろし）
 して袖（おろし）震（おろし）の中よつじ
 白妙の袖（おろし）
 雨（おろし）の焼系（おろし）
 万代挿んづむらふ。挿ぬるさき
 右のさきも哥の如し（おろし）宗祇
 連七葉をさきもさきもさきも周桂
 春をさきもさきもさきも昌休
 春をさきもさきもさきも宗碩

俳七葉の唐土のさき挿ぬる宗祇
 六月八日中に七日のさき挿ぬる鬼貫

七種ヤわらぐさの如く朔時 其角
 ひとさだらのまきぬせんわらぐさ寥和

狂よりのさきもさきも唐土のさきも
 日本の人乃るさきもさきも入安
 若菜とさきもさきもさきも来焉

詩 若菜之詞

野外 芜菜 世事 推之 蕙心
 野外 芜菜 世事 推之 蕙心
 爐中 和羹 俗人 属之 纖指
 爐中 和羹 俗人 属之 纖指

詩 七種詞七字對句

詩 礎

七葉仙 蕙菜 月吐 万家春
 七葉仙 蕙菜 月吐 万家春
 千株御 柝拂 烟開 春盤新
 千株御 柝拂 烟開 春盤新

詩七種詞五字對句

同上

官樹千花發

九重中禁啓

階賞七葉新

七日早春還

堯ノ代ノ冥竹

人日上レテ始メテ祝フ

七種菜

延喜七年より始る上の子れ日内藏寮内

膳司より禁中へ奉るころり、或は

十二種供するもありし由公事根

元見へり唐土の七種の菜

羹と食してよろづの病とのぞく

と荆楚歳時記より然共

何の草といふ事と出ず本邦の

七種も諸説まちくなく寛平

年中の哥母のやうなつふこま

うそこづらまざらすむる

らうらうらまや七草又一首

ぢりぢりまざらなびこ仏のぞ

わらまざららまを七草と

△芥の水やう早芥の二種通用

とふ△まづふ東風菜と名づく

哥書ふの千草といふ△まづ

いそこまざら本草の佛耳草あり

△そこづら本草の繁縷あり俗

かまざらといふ北国といふおこまづ

といふ○まざらといふ詩經に詠する

所の卷耳あり京のまざらと稱こ

のまざらといふ△まざらといふけり

れ二種ありまざらと用ゆる

是若菜ありまざらといふまざら

まざらといふと深秘あり既母

本篇博物笥より委しく解と△

たづらといふ和爾雅より土器草と

冬より生じて地より單黄

花をむく△佛の座の小児のよ

ぐんげ花より唐より碎菜蒸と

いふ○あまの青齋の事あり

○延喜式七日の若菜を献せり

る事より今もて七日に用

ゆる事よりまざらまざら公事

根源より七種の菜を食する萬

上未日

邪氣を除く 蘆火を持って井にさし
廊の中とてせむ邪鬼皆走去る

祝詞

新禧休北喜事日漸
新社駢臻無勞莖蔡

占ひじて日出度事が知二 今日と
て有と云支蔡ハ龜占入 日 狗日と云

二宮大饗

二宮といハ東宮中
宮の御事なり

公卿以下二宮よ参りて拜礼ありて饗ふつ根公事
朝

觀の行幸

是ハ天子年始の事
おさうして上皇井小

母后の宮へ行幸る事なり公事
根源よ出朝觀の二字ハ礼記小有

臨時客

攝政関白の家小大
臣以下の公卿を招

きて遊びぬへ定まる公務小わ
らざれ臨時の客と申す源氏
物語小ハツムンゴ客とあり御ゆふ
みど有てさいをううへて樂器

を用ひざりて野曲の人も笏拍子
少てうらふといなり

梅ぐえうらふ事ハさきゆふる

詞神とつゝ祿ひまてある太夫人
はのそで宿のものをびあまを觀ふ

告朔

論語小朔を廟小告ると
なり毎月朔日百官の

行事とあるして天子の殿臨見
入るなり當月の政多とゆへ今日

或ハ四日などハ行りたりなり

非 年行事を祭らんとするを登ける
かゝるの事ハ此後をむかひん其房

摩那切始

高橋大隅の兩家
是を行ハ夜小つと

商初め

買初賣初家より
三日四日などハ有

非 幸あり初めが
まの福を奉此君 京天狗酒

六原愛宕寺門前の弦刺あ
宴 つまらして祇園會社と定む

堂中小太鼓ありこれきたる螺
と改甚どさかざりてゆへ天狗さり

りりといふ○東西
本願寺松拍子 大坂 船玉祭

船持舟玉 近江 鳥つるぎの神事
の神とまゐる

鳥へ正月二日 三 今日と猪日と守
ありて毎年 日 不成就日○今日

江戸御諷初 老松東北高砂 たり薬 千瘡万
病膏を

銀器小入て天子小奉る金名指小
つけて御額并小御耳のうらに付

らくとも延 京 北野裏白の連
喜式小出より 歌○比叡山横

川西塔元 大坂 天満石
三大師會 不動参

四 今日と羊日といふ○開基の福
日 節といふ今日と二年の基と開

沸 今日三日供する餅と菜等とを
いして喰ふ福沸といふ祝の詞

餅の異名と福生果といふ故りちの粥
と福沸といふや○又七日喰餅菜のや

とも福沸と云○又正月 若水と扱て物と煮ると
能くくといふのやのなを福といふ

かえ開 神前其前かき其外家々
餅と供する鏡餅といふこと今日七日

十五日等小をやして喰ふ○開といふは
夏ありきるといふ忌祠故にやといふ

非今初向ふ東かきものらつて光廣
百髪と春 今日 京 飛鳥井家

白髪と髪けの重てを 京 蹴鞠始
難波冷泉の 大坂 天王寺芹田

両家皆同日 坊の修正會
五 今日と午日と守れらるる采地

ある人の農人禮と勤るなり
天氣 雨れは五穀小 叙位 五日

は蚕糸ありし 六日

諸臣の羊膺を奏し次 **木造始**

弟小位を叙する事あり

禁裏の **萬歳** 五日禁裏へ来

行事へ **萬歳** 千壽萬歳

といふたり 一條院の御宇大江

の定基三河守に任じ其民よ

ぎへて佛教傳來の因縁とのて

舞しむこれぞとてととあり

非 初まのされと名を方来示 觀

狂万歳は後いともくは後い

八百八十四文 **猿引** 是も今日

やせり 不白 **猿引** 廻 禁中采

お之 **非** 猿引や猿の 東福寺

引らん 酒樽 嗽石 **京** 五百羅

漢の画 **大坂** 天王寺太子堂

像掛る **大坂** 生身供 十四日

六 今日と **六日年越** 七日式見

日 馬日と **六日年越** 今日と

京 高其室寺 **江戸** 浅草寺

近江 山王三宮七 此日岳小登り

陰陽の気と鎮ふ事を得て年中

の煩惱と除くの術也と萬華谷

といふ本小出たり李亮といふの詩

詩命駕外西山 寓目眺原疇と

作さるも ○七月と入日と云△又靈辰

此事なり といふ人の万物の灵也

といふよよろて靈辰と名つく○三

戈圖會小の曆と違ひ今日と往

亡日と守出行を忌志うれも頼朝

出陣と諸人往亡日あり

といひさうぞとれあれてうま亡ふえ

とてうて軍利ありととかり

天氣 風雨あま **白馬節**

會 七日白馬と見れ邪氣と

馬北正 弓くく馬の陽の獣青さ春

の色あり故ふ春の始は御覽ある

あり白きりの青きりて見ゆる物
夫也人の馬節會といふや

詞百本の意下りえ。此意。より
の。の。を。を。松は茶を。や井
は。引。つ。杯。茶。鴨。排。白。を
引く夜のそくも月元。那。重勝

御弓の奏 七日の節會。兵部
省より奉る天竺の

多羅葉の其長さ七尺五寸。わは
御弓もそれより。七尺五寸
る。ゆ。へ。を。御。し。と。申。す。り
一説御執の奏といふ心も。り

御修法 紫宸殿にて勤る七日
より十四日迄東寺御

室より修行。古昔に此所。小真言院
有て修と今に寺を。暫く南
殿を行ひ
たまふ
七日正月 本朝。今日
と五節乃

ひ。ひ。正月。少陽の月。七。少陽の
敷。今日。少陽の月。少陽日故

上の朝庭より下方民。い。を。宴會
と。若菜の。物。と。食。す。の。日
の遺風と。七草若菜の。詩
哥連排の四十二目若菜の外あり

△七州。と。昨夜若菜と板小の
せて日本の鳥と唐土の鳥と渡らぬ。記
小七草。を。い。て。鬼車と。鳥
鳥。人。家。の。人。を。害。す。の。此。鳥。と。人
は。心。の。鬼。車。鳥。の。支。事。文。類。聚。に。り

△福。若菜の。△薺の。七州の
△を。摘。高。摘。若菜摘。存。り
る。の。類。つ。と。正月七日あり
る。杯。の。奥。の。草木の部。委。

詩 人日詞 盧全

春度春歸無恨春 幾年もくモ 今
春。ム。カ。ル。也

朝方始覚成人 朔日ヨリ六日。テ。ハ。六
畜。テ。テ。今日。始。テ

人日 徒今克已 應猶及 今ヨリ人
ト。ス。今。ヨ。リ。人

願與梅花俱自新 梅ノ清キガ如ク
心。ラ。新。メ。ント。ゾ

○人日 金縷人 以テ人
金。系。と

て女王小祿を賜ふ公事の時女王
祿の女は字とよほと王祿と計ふ

京 空也堂鉢 撰津 △篋の面并
天富八日
寅刻

昨七日より 薬師 月毎
叅詣多し 八日と十二

日と縁日とく諸方
とも叅詣あり

九日 今日天氣 きつちのそう 九日又ハ吉日
晴まハ梅
よく実の 吉書奏 とまらびて行

る大臣叅りて諸国の守釣と給ふ
て不勸の倉と開くべき由と奏す

る之俗ハいふる 撰津 西宮民家今日
戸とをり出さ
居籠とつ

十日 天氣 月ハ暈あり春中旱と
併暈早くきありハ早せむ

○午の三刻風とほき 帳釘

帳書 今日明日とりてとて商
帳祝 賣人の家よいといて年

中れ賣物買物を記し置く帳
面とどらるる 非 帳とらるる

とハハ 多ハナ 夷祭 十日夷と
西宮今宮代や名不

小刺も春はき 龜音 狂 ちん ちん ちん

ゆく 常陸帯ハ神事 常陸
の国

鹿島明神の祭ハ日女の懸想人あり

帯ハりさありて神前ハ置ふ其
内とらるる帯を見て女のくけ

帯のまはらるるすまら其とら
けぬの男と親くちなる事あり

無名抄ハ見へらる 非 ちん ちん ちん
ありぬ風も神さる 東怒

十二不成 鬼宿大吉とらる事ハ正月の
日就日 始吉の字とらる今日吉と

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具
足ふとらる ちん ちん ちん

煮とあして喰ふこ。江戸御殿中并
小諸大名の屋形も同断かりその
かこひ廿日之大猷院殿君の御月忌
あるゆへ兼應壬辰の年より今日
あつらふるを**非** 緋威の海 **縣召**
老もあつらふと祢のま 木冠

除目 今日より十三日まで三日行
りゆくアガタとい郡国と申

あり諸国の受領を召て官禄と玉
りさびやく申さ執筆の大臣参り
て御殿の廣庇ふて行ふより**前年**
中行事哥合やとみさるる悉く抄さじらわ
かこめりめぐるにあふふ名こそぞ
ゆき新納言**非** かつけと對の

縁の楚岫 **事始** 今日何事いふす
仕初る帳の表書

ちど **京** 柳原の柙小神酒と供す
するこ 今日と廿一日毎月なり

二十 今日と花朝 **天氣** 今日日小暈わ
の節といふ きの月中雨多

登より晴きハ月中雨多。月小暈わ
ハ飛虫の類多く死と。今日
一日ひよりあれハ百菓よく実のる
今日と十六日と雨多。ハ年中雨多

解齋 御粥 日の御座の大床
かて臺盤一脚と

立て供す御粥赤さかつけ小和
布の御汁物をとへり三口食ふて

御箸と **薬師** 毎月今日と會
くると云 日寺参詣多し

三十 **天氣** 今日快晴あれハ **大坂** 佳吉御
毎月十三日 和は 弓。御

結鎮しも云弓矢の大礼ハ **南都** 真徳
神后皇后三韓退治の時より始 **心経會**
する天下太平の御祈禱あり

四十 今日と俗よりんううと又 **削花**
○かひ子れ羊天一天上

柳の枝とけづらけて門戸ふさすこ
柳ハ陽木ハて祝ひとまどるハ

とふも用 **踏歌** 殿上地下の輩
る木より 然るべき御殿

とめぐるて催馬楽と云ふ舞ひ
かきける事なり天元六年より始り
くくても唐の世小長安に踏歌
せしめ事潜確類書小出より
我朝より持統帝の時漢人來朝
して踏哥と奏と此時萬春樂と
舞ふ今の万歳はこの余風なり
これに男踏哥といふ十四日の夜より
女踏哥は十六日の夜よりあり
このとよめありともいひ又踏哥
の節會ともいひつゝ京中男
女の声うはつゝ能うさうさ
と名ははらへて年始の祝詞と
なりて舞を舞せむとせむ侍に
ゆへに或時和哥と云ふ又詩
と云ふふぬめくもあり源氏物語
小竹川をさうさふと出より高市
子小綿の花を作る是をさうさの
ことといふ又ありつゝ小朝吉の文
とよくするめをさうさ踏哥声調

さあぐめらると事文類聚有
あぐめをさへ十五日の夜と云

年中行事踏歌 貞世
そのその声さへをさうさ

くさじのうさへ月夜み
非といひぬを祓けはは踏歌其角

頭排綿 綿の作は花を冠の額
かつけをといふあり

踏歌詞 唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太

平人今夜イロクノツクリモノアリ都
人民皆太平ノ御代ニホコルツ

龍街火樹千燈艷雞踏蓮花萬

樹春梅蓮ナトノ造リ花ノ燈籠
カザリニ竜ヤ雞ナドヲ見事

二造ルニキハシキ見物ナルツ

御夜月會内論議 南殿御奇會

の結願を行ひ問者講師御奇會
御前御奇會にて論議とれば内論議と

正月一日令十四日十五日 正月五十五

申す 十四日羊越 繩引 細引

いふ大づまを引合ふて勝負おつひて其年の吉凶をあらわす事なり

△土龍打 うごころを打て地 京 北野 神前

午王加持結願正月朔日 江戸 谷 中

感應寺 大坂△生身供 天王寺 五日より 今日迄

十五日 天气 今日雨ふまは 八月十五日

又雨少る○天晴まは 測年之 又雨少る○天晴まは

豊凶 今夕月の中する時一丈 測る七尺あれば大豊年六尺も豊

年九尺一丈水とまゝ三尺四尺五尺の旱

養生 今夕夫婦の交わり 禁ずると

命短く 三毬打 左義 正月 長短お打

あつて天地人は表しやと上るハ陽と

まろく○今の世民間の正月の

さう松竹あらあいの類とやく是

とらん○唐の元日お竹とやく

竹のやう音めて陰氣をうひ妖邪の

あつとのおとく 本朝これより

△爆竹 もちりちくとよむ。又竹とわさる

△土口書上る書初 まじりて今日やく

△一花びら あつてまじりてやく

非三徳おの唐土の老れ まじりてやく

狂お敬ふのかりて まじりてやく

詩 爆竹詞 ハクチクハクホコラ 黎淳

自憐結束小身材 一點芳心未

肯灰アハレナル材木ナレドモ心ニ時セツクウライカニハツシントウセウ

節到来寒焰發萬人頭上一聲レイ時来リテ火ニカハリテ松竹ノ鳴ル

雷音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒツクク

御薪百官悉く薪と奉りて宮内省おおさかくあつると々

赤小豆粥祝紅調粥△粥桂と小豆

清心納言枕草紙ハ十五日ハいりか

粥△粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥十五日ハ杖の如き物と云

平岡の御粥河内国恩知平岡の

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥十五日ハ杖の如き物と云

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

肯灰アハレナル材木ナレドモ心ニ時セツクウライカニハツシントウセウ

節到来寒焰發萬人頭上一聲レイ時来リテ火ニカハリテ松竹ノ鳴ル

雷音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒツクク

御薪百官悉く薪と奉りて宮内省おおさかくあつると々

赤小豆粥祝紅調粥△粥桂と小豆

清心納言枕草紙ハ十五日ハいりか

粥△粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥十五日ハ杖の如き物と云

平岡の御粥河内国恩知平岡の

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

粥粥杖とも云○昔ハ禁中めても

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈樹ヲ燃セシ故事之天室遺事ニ見タリ

士女遊 唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ

燈火白昼ノ如シ士女一人モ夜行ススト云フナク車馬路ニ塞カルト

靈異小説 **傳柑** 今日唐ノ世ニハ二出タリ 貴戚黄柑ヲ

贈ルコトアリコレヲ **虹橋ヲ架** 怪 傳柑ト云フト

録ニ云ク唐ノ開元ノコロ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何

レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルコトアラジト帝ニ

夕何シノ術有テコレヲ見シヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラル

ヤガテ大真并ニ高力士黄香綽樂官数人ヲ從ヘ歩シテ橋ヲワ

タリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

花燈 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモレ舍利ヲ拜ス也

○至道元年燈夕太宗御樓是花燈非燈夕舍利ハコトモレ花杜吾

京 加茂左義長並ニ神事○嵯峨秋迦開帳ノ八幡厄神祭 十五日

伊勢 △獅子頭神事 山田度會郡ノ獅子頭と神体と十四日十七日追祭

駿河 △御穂祭 三保大明神是之三穂津媛命と祭る十四日ヨリ十六日迄ナリ

養生 今日大酒とハキル又夫婦の交すハ

天氣 今日西南の風と入門風と豊年のあらし

東南の風もよー西北の風は早

女踏歌 十四日男踏哥の如し京中は男女

声よく哥と云ふを先とて年始の祝詞をつくりあらし和

豊作也大雨あり秋洪水あり
曇るの秋作不宜昼が晴るの害は

京 禁裡伶人の舞御覽并に
鶴庖丁大隅高橋隔年小

大坂 天王寺東照宮御
法楽の同所金堂

江戸 上野御茶詣
御糺束にて

今日と落 養生 今日怒る
賭 事といむ

弓 天子弓場殿にて弓を射
あふるなり其負る方ふの罰

酒と賜ひ勝る方ふの舞楽と
奏す大く近衛の官領されし事

大將射手小饗を賜ふて
とさかつりあふるといふあり

年中行事奇合 よみ人あは
擗り射子の司候ははまき

かつりあふるといふことふ
夫木春そり擗はまきりて

河原の心ふまるとをす頭仲
非多し射る娘らや二人張友静

京 禁裡の左義長○山崎室寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏奇節會
○新清水寺観音供

十不成 八幡厄神祭 今日まで
九就日 京 参詣蘇民将来札守りと

天王そんが情を得ぬい汝が子孫永く
災難をまぬくると言ひてあへるゆへ

そんしやうらひが子孫くみれをうけり
とより厄神の午頭天王ふるを

△吉田社清祓 厄神とて人事あり神
樂園二十六本の御をい

と立神祇官夜亥の刻小修行せし
法然上人御忌 今日廿五日迄
四ケの本寺にて執行せしむ

非人の世を乃どろろ日た林其角
種をむ法を華双ふ移竹

九秋收日 天気 晴天され百菓
日とよ 熟す

女鏡其祝 皆み祝ふ事廿日初瀬
と字音同し故世祝と

習俗をう女人の鏡臺小供餅と今日いそを喰ふ支まり 今日

骨正月といふ京大坂杯のみ今日塩魚の骨の大豆酒のめと煮喰ふ

廿日團子 今日だんご喰ふゆ名づく。唐土江東といふ取

今日紅の糸はく奠餅とつるぎ屋根の上のねまてこれと天穿と

名はらるるり。拾遺記の見えり北日ふだんごぬらふも是

とまきぶ 江戸 諸大名将東みや 江戸 小て上野参詣

下交日 嚴島祭 安藝の国。市杵嶋の神云地景の美なる故名つく

北一日 天氣 風雨と主る日之風あけ雨や若晴ふ似翼日風雨

内宴 仁寿殿と行る文人み題を賜り詩と作と御

前と講せらるると之(お)年中行事哥合子子旅神の泉れその如と

花をみるの 京 伊勢祭主柳原の神小御酒と

供せらるる。○本国 江戸 高輪毘沙門堂富突

廿二日 京 太泰聖徳堂法事○大原野春日社祭(能あ)西国灰形祭

大坂 天王寺太子堂 月次の法事 音 三 日 京

東山善正寺 川寫祭(松尾) 秋迎の開帳 日四 日 京 愛宕山参り

江戸 増上寺上坐法問 諸大名御將東(泰詣) 泰詣 ○愛宕山参り

廿五日 養生 今日房 天氣 月小暈有(樹小虫多)

京 北野小法樂 連哥(毎月) 御忌 法然上人御忌日(知恩院光)

明寺黒谷智因寺 百返 浄花寺四ヶの本寺は於て 法事あり十九日より今 初天神

京北野 江戸湯嶋 大坂天満 参詣多 日六 日 京 西田下津 林神事能

廿不成 京 ○泉涌寺舎 利會
就日 ○西の岳牛ヶ瀬祭

廿八 江戸 目黒不動 叅
大坂 北野石 不動叅

初不動 今日縁日ゆへ諸國
不動叅詣多し

晦日 天氣 今日風雨あれ 清水巻
ハ米價貴し 京の連歌

白髪と除く 今日井華水と少し
とくり吞バ鬢髪白くある事すし

月令 此部ハ日の定まらざる正月
一ヶ月の事とのハ初春の
しついで元日次出と

外記政始 尤吉日と多し
外記ハ恒例臨時

の政事と執行ふ官なるゆへ正月は
いまだ當年の政と行ひ始る義あり

店卸 帷祝いと同一類ニ非一率
のんきとや扱ふハ風琴

傀儡師 傀儡ハつとよむ
驛舎の留女の遊女

とらひなる狐とつとよみ人形とま
りて其々つと留女の身なりと

ふのせしハ傀儡師といふにては
るわう又でこととよみ 西の宮 淡路

詞 ちこそまへり 山猫つとよみ 志むの作
非箱小鉢て表せぬ猫や傀儡師 汶上

夷廻 傀儡師の類して初春ハ夷
の姿とまへり目出度とを棄

初芝居 昔ハ芝の上ホて見物
し故志むおと名づく

一説ハ右店卸 傀儡師 初芝居乃
類歳且小次ぐりのとつと可考

三節 正月元日 七日 十五日
右と三節といふあり

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日
と多しと門人より

よみきつる歳旦の句をあらわ
席とあつて句の次第と定む

正五九月説 本邦専此三月
慶賀の事とす

或ハ親族相識宴會とあると唐
小てハ此三月官小登らむと萬の
事にも用ひむと五雜組小見
えと清波雜誌小曰く佛
法此三月と清素月と
名附て殺生とわくをさだ

正月衣服

上つるふりか衣
服小かごうて定む

櫻衣表白柳衣表一ろ
裏赤色

上つるふり正月右のいろとや
た多ハ正月の氣ハ應ずる色ハ

當月綿入を着ると以て正身
袴ハ柳色あり是元素袍の製

女衣服上着地黒間着
地紅下着ハ白

むくいろえり淺黄の小袖上着
さめて間着上着皆り裏赤

さるも初春の莊上着いろ白じ白
りけハ松竹の繪と縫ハと白

時令

此部ハ初春の時候
小ハ初春の事と出と

初春

春立日より三三日三
ハ早春と同心

梅や咲花のおとらん子代の着

俳号やまななぐく禮久一晋子

初春や乃ハ子もはくは曉臺

兼久百首 初春日 忠房

柳のうれハうらいとふとろ

建保百首 家隆

春もハけまよハあへぬやうけ

續古今 初春霞 為家

草庵 初春鶯 頓阿

雪の去はけ庭ざりのくれば竹ふ
いと明まはるまやてしらん

柏玉

初春海

道遙院

波風残さくぬぐりて四つ^の海の
我さく物なるとまやたつらん

^詞を履^ののけとみよりけり

履む長閑^履立^初る。春^とえ

さぬさくろ。雨^ふりりとめむ

草^木。風^のどりある。まの初^風。星

り^ととある^る。毛^の元^日は天子四方^年

べく^す煙^民のあまご^娘。おけの

き^り。履^そふ。少^とけ初^る。曉^撲

き^りとむ。袴^の声。春^とはくろ。八^声

れ^の春^と若^る。朝^天は戸^の明^て

の^けと。お日^新履^む。年^改玉^ぬ年[。]

年^立ゆ。手^のどりめ。ま^とと。

ひ^よる^る。子^のとと^たり

久^と。春^ある^る。春^のま^はれ^はけ^り

ち^よの初^ま。春^のと^りり。ま^ま立^る

らん。春^の来^る。山^雪もむ。風^のど

る。出^る初^日の履^む。海^邊波^は

む。風^のどりある。遠^く行^く

履^む。波^風のどりある。お日^新

む。水^邊氷^とりあ。

氷^のひまの打^ある浪^な。ま^の初^む。

あ^めるむ。野^下りあるま。春^回あ

る。木^このめ^きある。風^まが^り。

打^履む。松^門の松^一のま

梅花^とはくろ。雪^のくちりあふ。

笑^初る。おとろ^り竹^異竹^の初^む。

よ^明ま^はる^る。竹^の葉^はけ^るよ

ら^とを^える^る。春^を。草^り初^る。下

め^らむ。春^回あ^る。氷^少とくろ。

春^と初^る。ま^の初^ま。雪^まは

る。春^をはくろ。谷^け戸^出る。ま^ま

ま^がれ^る。今^おより^ま。世

治^まる^る。代^のま。代^のま。初^初

代^も日^と春^く。初^代に^りむ。

く^らり^子。白^敷る^る。衣^はを

ま^らる。春^のま。人^春の

りろ人。神死つゝ縁て行く人の心
此のころる。佐穂姫（佐穂姫）掉燈（掉燈）の露降家
おとてて襖ゆゑふ春の来ぬり
都々この春。九まねま。花の都の
初ま。垣かたねのまりえ初る。雪
まのふゆの久くこの天の志戸。天
の戸。雲井。よの奈の路る。のろ
ころとまゆま。

狂（狂）山依のあひれらどめと夢く耐り
門もよれけしあのまのいま 信徳
○初春早春の題ふ立春の哥よ
みまのらる。かたはらも立春の
題ふ初春の哥い詠るうす。立春
とつひ春の節一日よかろく

早春

哥万葉

初ま、くろく見る柳

雪のこめてかぐづくま（雪のこめてかぐづくま）

拾玉 雪中早春 慈鎮

耐しあれがくくままの露（耐しあれがくくままの露）
雪のころくみもたふふくれ

州庵 早春氷

頌阿

山川のあはれ波をくくま
まこまろく砂（まこまろく砂）

夫木 曉神祇

家隆

神山の心月れま力さえて
ころれまろくま（ころれまろくま）

同 名所早春

如願

相坂やくは見えもあへぬ杖た糸に
まこまろくま（まこまろくま）

宝治哥合 早春霞

信実

初まあ色もままあく玉の
まこまろくま（まこまろくま）

詞 鹿ふまじ

淡みまろく

ま。まげふまろく。淡まろくま（ま。まげふまろく。淡まろくま）
風まろく。春まも。春のまろくま（風まろく。春まも。春のまろくま）

非 雪のゆまろく

多柳れま其角

狂 あく玉の春まろく

まろくま（あく玉の春まろくまろくま）

詩 早春詞五字對句

同上

まのれまろくま（まのれまろくま）
漱口

物外山川近

風光新柳報

春初景色新

宴賞百花催

詩 早春作

唐 暢諸

獻歲春猶淺

年アケヌレト 園林

未盡開

百花ヲ催シスレドモ 雪和

新雨落風帶舊寒來

雪ハ雨ニトケテ

風ハ未ダ余寒ク 听鳥聞歸雁看花

識早梅 飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被一年催 世ニ一年ク

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒

春ホ多クテモ

非 沙汰

宝治百首

入道大政大臣

貞應百首 為家

柏玉 餘寒雪 後柏原院

玉吟 溪餘寒 家隆

千載 餘寒月 為尹

詞 春を

春の

衣

月

風

池

日

采作式候山く之
ヤキウ ヤマク

雪未不融一の電音
ユキ ムネトキメ 一ノヒトナリ

冬遠糸ふ仕ひる積
フユ トウシ イトフシヒル 積

吟てまきくろる年
ウタヒテ マキク 黒ル 年

皮車存い
ウツチクルマ 存イ

尺牘 秘華と書替と記を
シツク 秘華ト 書替ト 記ヲ

頃 上 多日 中 數日 下 無事
ウ 多日 中 數日 下 無事

起居 上 貴體盛壯 中 平安 下 無恙
ウ 貴體盛壯 中 平安 下 無恙

積雪 上 山嶺白雪 中 密前雪景 下 殘雪皎々
ウ 山嶺白雪 中 密前雪景 下 殘雪皎々

想像 上 樹示 中 曲許 下 不佞
ウ 樹示 中 曲許 下 不佞

請示 上 擲示 中 曲許 下 不佞
ウ 擲示 中 曲許 下 不佞

狀 餘寒之文返事 尺牘ハ漢文
ウ 餘寒之文返事 尺牘ハ漢文

如く今春未だ和氣
ウ 如ク 今春 未ダ 和氣

若論雨雪未散
ウ 若論 雨雪 未散

山林閑寂詩人感興
ウ 山林 閑寂 詩人 感興

恥魚著述 他日
ウ 恥魚 著述 他日

得暖年公在為四ノ中入以
ウ 得暖 年公 在為 四ノ中 入以

得暖 御問焉
ウ 得暖 御問 焉

のこりなきあつちのこりなき
ついでとよめてまはるる 正月 あつちのこりなき
ふるさつ あつちのこりなき

① 連 さへたりる 淡雪 あつちのこりなき 春雪 あつちのこりなき 不知

② 非 是とくく 春乃雪 あつちのこりなき 支考

③ 狂 まう 春乃雪 あつちのこりなき 常楽菴

④ 春雪盛山浅 海暗雲無葉

⑤ 夕風輕地寒 山春雪有花

⑥ 官室雪花齊紫閣 春雪關

⑦ 関河春色到青門 疊雪輕

⑧ 前庭花少春空度 帶雪妍

⑨ 後嶺雪深月更寒 雪不寒

詩 春雪五字對句

同上

詩 春雪七字對句

詩礎

シユンセツカニシヤセアサク ウミクラクモニナクハ
ハルユキニテ山モアサクニユル ウミツラ ヲニクモル
セキフウカロクナサキ ヤハルニユキアリハチ
クカクカセハイニサキトヤクノユキハチコトシト
キウシツセツクハヒトシカニニ ニニセツクモク
クハシカンシユンシヨクイタセイモニ デウセツカロ
センテイハチニシハルハナレクワタリ オヒテユキカ
ハルト云ハチバカリニテハハサカ又 毒菴
ユキフカイユキワカフツキサラニサカニ ユキスサカ
ユキヲリツモリタル山ノユキカケハサレハ

詩 殘雪七字對句

詩礎

コハツヘテシユンシヨクセウレサシタラ エイスレシヨクニ
湖添春色消殘雪 映新陽

江送潮頭涌漫波 又多時

遲日未能消野雪 對南樓

晴花猶自犯江寒 雪中春

韓舍人書齊殘雪 戎昱

風捲黃雲暮雪晴 江烟洗盡柳

數片無人拂 又得書窗一夜

明簷殘雪ハラフ人ナキガ却テ昏ヲ
見ル窓ノアカリトナル 徐康カ雪

雪解 雪解水 雪霰 雪澌

雪流 雪の之間

○新古今

前参議教長

ワカ梅神をまつるる春日の
さぶ火けの人の名乃む消
草菴木未のたたと見よとくは
らん春に消行をたのむ頃阿
詞名る。おけけの。名消る。名の
こまの。名とくる。のころ名

○狂の男なりて日ねりまどか
くやくもなる名女之那貞徳

○詩雪解五字對句 同上

オウチカヲヨセツツキ
送寒餘雪盡 寒雪多秀水
ユキケミツ

カセツオホシラスイ
迎歳早梅新 碧洲盡清流
ユキゲミツ

ハシヨクユキヤタシニスイキ名ヤマサニルニ
巴蜀雪消春水来 山更春
川ノ名

○詩雪解七字對句 詩礎

モウタンクモツキテボサニイッ
湘潭雲盡暮山出 水乱流
ミツミダリニ

雪頽附 雪の山よりくさる
乃あふ山の麓と通らへ高根を
山下の様子と尋ね合せ油断を
く通るべしとてて峯高
根の雪解上よハ雪もあまど山
の肌峯より解落る雪水まで
ハ山の肌と雪とを切てる
時ハ裾へまたり冬より積
たる雪をれば磐石の如くより
それふうとて死とる事多し雪
もぐれくまへ瞬目の間ハ落る
北陸越後あふハ越前近江の
境ハ甚しづくても雪国高山
の所みてハ心 春氷 春小のり
得て歩行へ 氷くると云
又春風よとけ行く心もよる

○新古今 藤原秀能

夕月夜波さらまらに波波江の
きれたるをのあはるあはる流

詞 氷の白玉。おもしろ。春風。弦の音。水

詩 春水七字對句

詩 礎

引水 忽驚氷滿澗

水重文

回田 空見石和雲

引溪長

殘氷

春の小川とけつて氷

氷解

建仁寺合

家隆

氷とく。春の山風ふれぬし

詞 氷をぐるぐ。わてとくは。ひま。わらふ。春風。池

俳 氷うまえて。破鏡や思ふ。連氷。お波。形くうれも。昌休

連氷。お波。形くうれも。昌休

詩 水解五字對句

同上

鳥飛林覺曙

風兼殘雪起

魚躍水知春

河帶斷水流

詩 氷解七字對句

詩 礎

三代樂回風入律

水初綠

四溟歌駐水成文

水知春

詩 氷解詞

儲光義

洛水春氷開

洛城春樹綠

花亂馬足

落花馬蹄

山笑

初春の山の姿とひま

春の山。草木。けり。さ。ら。あ。ろ。う。り

詩 春山

氷。治。如。笑。さ。る。の

山の草木も志げらば口のなをへて山の姿もことじ笑ふやうなる物と云ふ

日待月待 九三夜九六夜毎月 此事とす人も有

と別して此月祭つて公とする事あり 天地月日と祭つてあふ都て天子

の對つてせぬ事して常人の祭の僭踰の罪甚し 天子は天地と

まつり諸侯は社稷と祭り大夫は五祀と祭ふとつり況士庶人を

敬ふこと恐るること事へ非礼の祭りをあす人の福あくして禍あり若本

邦の礼はあつて祭らへて歌ふる人の沐浴齊戒して朔日は朝日

とすいし十五日月と拜せり理小おそ害あるべし供物等用

ゆる事あつて江戸にては廿廿六日高輪鉄炮洲と諸人群集

して月と拜と是俗人の是非の君子是は不習

草木

正月草木類此次にあつては二月の季まつても不苦分り

松の花

異名黄花 若翠 松

△みどり立右つりまこと春あり若こころに黄あつるりのあり是と松の

花とよひ一説は松の花は百年は一度ごとく日出度りのことつり

連 雪れたま糸にありぬ松乃かせ 俳 翠の松の姫松とこそよ思貫

狂 常盤さる松のみどりも春への今一も葉子れあらひ 正継

哥 草庵 頓阿 君任とつりもまきさる宿なれと

新拾 春松久緑 雅家 幾子代とみどりとそとて相生乃

新古 松有春色 太政大臣 松と君とのゆくさ清乃とほ

をへてふれぬも雲のほみり 松母そ子代乃と色ハナりれふ

玉吟 松色添春

家隆

万代も修にのみらぬ松乃松
色いあはのまはゆるをて

同 春松契齡 後鳥羽院

交のむ神路乃山の松れう坊
我志のまもまをかのり

新續古 庭松春久 左大臣

庭の面小本考れまのの松みり
来一不ま乃色にそ免らん

詩 採松華

姚合

擬服松華無所學嵩陽道士

忽相教 松ノミトリヲ服食セント思ヘ
ト其法ヲ誰ニ學ハント案

今朝試上高枝採不覺傾翻仙

鶴巢 今朝先試ニナラフタルトホリ高キ
枝ノ上ニホリ採ラントセシニオモヒ

カケズ雀ノ巢ノアル
ヲヒツクリカヘセシトシ

如龍 松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ
狀龍ノ如シト抱朴子ニアリ

ケスイニ
六帖ニ云ク回紇ノ拔河
ニ古ハ康干ト云ノ川ア

化石
リ松ヲ斫テ川ニ投入レテ三年ニ
ナレハ化レテ石トナル世ニ康干石ト云

承朝三物
十八公 吳子固夢三腹上
松生ト見テ松字ヲ

別レバ十八公ナレバ後十八年ニシテ
官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

詞ノ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ
テ暴雨ニ逢ヒ玉

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ
因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

靈並岩寺 唐ノ玄奘西域ニ往
時灵岩寺ノ松樹ヲ

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求ル
本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長ズヘシ

ト云ラキテ去リケル後此松西ニ指ス一
年忽チ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師歸リ来ルベシトテ
迎ヘ待ケル景玄并カハズ

松品類

黒松雄松も
常の松も



赤松雌松も
葉細柱
等小用て楠よりか



朝鮮松本唐松の
葉長く
色とぐれて遺実と松子と



五葉の松葉を
みどりか
色あかり



姫小松五葉に
似て葉を



つら木も
各
別のもの多く花小用ゆ



駿州富士の辺
多し故
故み富士松
も葉を短く青く春の葉出

冬も落葉と此松
四季も色を
春の青く見事あり

夏も黄小色
得も
冬は落葉して雪の降ふ

と枝ふた
事ふく



梅

昔の本朝花と称する
梅の中世の花と櫻と

梅の種類

△江梅 花白 野梅 江梅 大梅 花紅

△行幸梅 花大 千葉 鎖梅 花中 白

△豊後梅 花紅 軒端梅 花中 深赤

△鶯宿梅 八重 一重 故事あり

△飛梅 花中 難波梅 花中 八重 中 深赤

△梅異名 氷姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌

士渴 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好文木 故 綸音梅

△香敷見草 △此花 △春告草 △白州

① 連 句 後 知 人 誰 ぞ 言 乃 梅 宗 祇

春 風 の 寒 小 梅 咲 白 け ぬ 紹 巴

翠 花 け 言 ぬ 梅 の 花 全

② 非 周 け 花 白 梅 の 花 全

梅 一 枝 一 見 程 の 花 全

梅 一 枝 一 見 程 の 花 全

梅 一 枝 一 見 程 の 花 全

中庭の梅ふきはるきこのを鬼貫
のゆい程で水の初く初乃梅移竹
三味線も小あものは梅れを来山

万葉

坂上即女

妻これかまぐさく宿の梅れ花
ひよりあつや春日やうらん

夫木

為相卿

とりてらん初乃の梅れはるあふ
落くやうさと雪の一えと

万葉

家持

みそのよれりさの梅乃花むま
あめらあうり雪とよりん

家集

西行

梅ぐとふとらふ吹とて
入こむ人よし免よる風

建保百首

定家

梅ぐやえうつるしん
さあまいの花乃かぐん

新撰六帖

紅梅

信実

霜の梅れはるあふ乃あふ枝
糸さすの初乃のさるん

金葉

尋梅

為道

梅れはるあふのそと梅の花
そまともいんあふん

夫木

春朝梅

家隆

待づるあふの里乃梅あふ
マそらび人も神白よら森

新勅

夜梅

前笑白

梅が香もあふはる月あふ
それともんどうはむらう

夫木

夕梅

為兼

曉の風をまふてあふ乃花
このゆあふをゆけあふ

家集

山辺梅

仲正

よのつひつあふはるまふ
梅乃白いをたさりのふせん

家集

垣根梅

仲正

白あふを焼あを
垣根乃梅のころるうら

夫木

家梅始聞

能因

去時かひもあふいつか
うが花雲の事さるあふ

玉吟 曉梅

家隆

春のよのおちる月夜乃梅花を
庭も中してや明^{あかり}るをそと

夫木 道梅 法印定軌

乃のべ乃行雲山のう光れくふ
たらしはなをりま風をふく

白川 梅移水 頭輔

咲日よりむのを忍くもあつふ
梅のししたゆく庭乃中り水

家集 湖辺梅 定家

々々ぞふる志賀はたあまの位と
雪さそふそ那のあふべり

玉葉 月前梅 宗尊親王

梅が香はるくとの春はまごりふて
若乃たりとくもむ月け

新續古 海辺梅 有親

延虫人のしなくむ神も白くし
新波乃まき梅のたう務

夫木 野外梅 光俊

志記スの子枕れれ梅をさふ
ねて乃初歩れ神ふあふ

詞 くれまき。うすね。こそあ。白妙
咲。ちる。白ふ。舞く。や。まじ。つ。不。そ。

うつろふ。いろく。一ま。八ま。あ。ち。え。

志記え。あ。ち。え。○。山。谷。園。神。ま。か。

きの梅。花の。を。え。路。さ。つ。て。は。る。

誰者の垣。林。れ。梅。軒。新。波。の。梅。新。

の梅。が。え。窓。ま。の。梅。が。え。ま。ま。ら。ち。た。

南。は。た。垣。垣。板。の。梅。鳥。木。つ。え。ひ。唱。

て。梅。が。ふ。羽。風。も。白。ふ。存。ぐ。う。若。の。

わ。ふ。て。ふ。ま。梅。は。花。ま。柳。枝。う。い。

と。春。眉。白。い。を。憐。ふ。白。い。ま。つ。そ。こ。と。

さ。く。白。ふ。風。う。る。月。白。い。み。子。じ。

それ。も。い。ま。ぬ。白。い。樹。影。や。ま。ひ。り。を。

ら。る。新。日。新。白。ふ。新。波。の。梅。雪。

笑。ま。ら。ぬ。白。い。う。白。い。あ。若。は。中。ら。う。

笑。夜。文。を。あ。白。い。か。れ。ぬ。子。枕。白。ふ。

夏。の。梅。も。白。ふ。雪。の。あ。あ。神。白。い。

と。う。つ。と。人。の。と。ら。む。神。の。香。り。か。と。い。

ね。白。い。梅。が。香。は。に。さ。そ。る。若。は。

や。ま。つ。ん。賤。志。の。う。た。を。あ。は。は。は。

冬春のそよ 病ふとく。自由の身
あつて病とる。雨も自由

詩 梅ノ詞

張籍

自愛新梅好行尋一徑斜

梅ノ花ザカリヲシタヒ往來心ニカケテ
小路ヲ横斜ニニガリミチヲタツ子ル

不教人掃石恐損落來風

ノ石ヲハラフテヲカズハ風ニ落松
レタル英ヲフミフンセンモノヲトナリ

詩 梅ノ詞 唐 彦謙

欲寫愁腸愧不才

思ヘトモ身不肖 多情練漉已低
不サイナルヲハブル

催云ヒンベタキコトハカヅクアリテ已ニ詞
ニイヒイダサントモヨウストナリ

窮郊二月初離別

サビレクナツカ 獨倚寒村鰥野梅
シキトナリ

詠ノ香ヲカイデ君ヲ思フナリ

詩 梅花七字對句

詩礎

柳條晴色不忍見 無數梅

梅花滿枝空斷腸 點人衣

寒澗渡頭芳艸色 弄綺梅

春梅山嶺上鵙鵒聲 正調梅

詩 梅花五字對句 同上

梅花交近野 梅靜澄容影

草色向平地 春明發筆光

梅故事 羅浮夢 隋の趙師雄 日暮の羅

浮山の松間ニ酒肆あるありそ淡粧素

服也美女と語ふ芳き香人を襲ふると

うちつ酒肆を叩きて共酒を吞

醉臥して朝不起あづ見まば梅樹

の下にありて酒肆

梅曆

山中
住居

も美人もさりとて
て春の至るともさりとて
を見て春とさるともさりとて
あるは梅花曆と云

詩話

蘇東坡の妹好んで詩を
作ふと東坡にまじり

山谷東坡小會して詩を作ると時

東坡和風揺細柳澹月映梅花

と作る妹の云く未可あらばと

大母笑ふ山谷是を見て唱へて

詩和風舞細柳澹月隱梅花

と作じし妹見て少く可くと

東坡山谷の兩人妹小ひうへ

汝う句いくと問ふ妹詩と即時作

詩和風扶細柳澹月失梅花と

作り志う二人も大の感とさう

好文木

晋の哀帝書とよむ時
四時とも梅の花開

ちうとつう故好文木と異名を

梅譜の梅の花の儒者へとつう

節分草

花は白花して一莖小

葉と出立春の頃さうさう故

又節分草とさうさう俳諧節

分十二月の季少く是も名

よと十二月とさうは所存

土筆

筆つたふ。南方の諸物
生を形筆乃如高

福壽州

元日小花さうさう

詞「春の明るの。若水。今朝長雨

非 佐保姫の如く秘るは後あま風斯

後あまたふ目もな秘る

狂 咲かふ梅は云釈の所さうさう

後あさうさうさうさう米都

詩福壽州五季對句

同上

淑氣煙相喜

瑞凝三秀州

風光草尚榮

春入万季秋

詩 福寿草七字對句

詩 礎

豈知玉殿生三秀

瑞色鮮

アニシラシヤギヨクゲンヤウスラシク
スレヨク弁ヤカ

吉瑞ハケンキ

詎有銅池出五雲

動三辰

ナシララントウチイタス
ウコク

春光元旦ウコク

草芽半吐參差碧

知春歸

サウガナカバハクジンサノモトリ
シルハルカヘル

トシチカハル

花蕊初開淺淡紅

嬌朝花

クハスイハジチヒラクセンタンノモナイ
コラチヤウクハニ

アサヒニヒラク

淺黃福壽草二重大大薄



白黃と淺黃と見後白多



八重福壽草八重とのく



聖粟新集

九月小種とまく初

若草

新草 初草 〇 初

春小生とる州の惣名之

家集

為家

春日のみひりるまにつあがて

たちもとるまさびのる春約

詞 〇のたさと。あのの居りのまさ。

あのあま。〇のまはたと。たままま。

あのまま。庭中をひく

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

あのまま。あのまま。あのまま。

河梁馬首隨春草 春州深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草

鄭谷

花落江隄 簇暖烟 雨餘州色遠

相連 春雨ノアガリニ草 香輪莫輾

青々破留與遊人一醉眠

青タル草ノ上ニ車ヲキンラセ草ヲヤ

ブリリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニ

トメヲキアタヘントナリ

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロガリテ隱年々

點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話

繁ニテハタダ春風ノ

フクニオホマカスノミ

下萌 冬かきころ草の春の出

洞外面の影。いざゆ。日影を園。

新古今やうんもゆかりの多き日

馬の木の芽かな 女羅 木芽漬

非 塩栗のくま 鶉堀

草木のきりかざり 芽と生

ざんといつらん 春の季あり。

春の艸ふつふし 春季といふ

秋の艸木ふつふし 秋の季いふ

水菜 水入菜といつらん 京都近

邊より生るといふ

蔓 蔓青の苗へ△蔓子 本草の苗と食ひ初夏心と食ふこれと蔓子と入

①非くくくくや医者の**蔦菜** 苗二

三寸ふみ **路** 蔓 △秋冬花△蔓子の草と云

ほひてふの **田** △田を△畑を△畑を△畑を

田のまをりしとせうくと事へ国かより春もまの冬至を五十五日や土ととく

中比く **野大根** 野蘿蔔も中比く

生類 正月の部ありと説(三)のてん卯有二月遣ても不苦

前後より戀ひ初るから春秋二度さうる春の牝を喚び秋の牝を喚んで乳で子を生とすく

多く育らがり孕て六十日して産じ生きて七日いで眼とまき

飯とらふ二月半さくまへ掛目百目さう有て乳をさるめてもよく

そらろ鼻の尖つひ小冷る夏至の中一日さうる暖かへ鼻と食ふ

上旬よへ頭より下旬よへ尾より食ふ猫の眼よて時刻とさる哥

六ツ圓く五八玉子小四ツ七ツ棟の裏あり九ツの針産は唐糸こ竹嶋猫

の二種あり ①夫未まき有系まき

さひあうくの糸これ糸ひげと糸

かひとがさうらよ仲正 ①詞か糸こ

の糸こたひまよる子細いさひあ

さく。紫簾のまきまき。りあ

はる。蝶ひらよまき ①非仇糸この

掌て居るらん **治諸虫入耳** 耳に

龍の心青我 諸虫の入るは猫

取糞尿法 薑あるひの蒜と猫

此牙にわたりあるひは生葱を身
のうらみ入まを猫ならしむる尿

白魚 異名 鱠残魚 能 白魚や淡
魚の歯は歯のうらみ入る其角

朝鷹 △さす鳥 △鳴鳥がり
△さぬ山 △さぬ山 △さぬ山 狩

△さぬ山。貞徳翁の説ふ宵は舞
鳴所を聞置未明ふゆたてたふはさ

とすす。朝鷹狩も。鳴鳥狩も
又さぬ山。とまて狩も云々。○さぬ山

とふ鷹狩ふ出る時の鷹は鈴が
付てたり此とさぬのさぬふとさぬこと

つふとさぬの口よさぬは是とさぬこ
さぬとさぬの鷹は神功皇后の時初て

百濟国より献とさぬの古堂上の
説ふさぬし其時先の手居居たり

今武家の説とさぬて右の手居居るこ
△堀川 やさぬのさぬとさぬとさぬ

△堀川 やさぬのさぬとさぬとさぬ
とさぬのさぬとさぬとさぬとさぬ

詞狩人物 さぬとさぬとさぬとさぬ
さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

紇子。約り。若さぬ。神の春風。茶
枕。さぬ日。たのさぬ。春の神分は。

くす。神のさぬ。さぬとさぬ
△非 初たのさぬとさぬとさぬとさぬ

初夜やさぬとさぬとさぬとさぬ
△さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

繼尾鷹 白 一條帝の御時源
鷹の頼政鷹尾と

鶴のさぬとさぬとさぬとさぬ
△さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

と見て山へさぬとさぬとさぬとさぬ
△さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

鷹鳥 連
△さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

△鷹鳥の雛鳥と佐保姫鷹と云説也
△非 さぬのさぬとさぬとさぬとさぬ

鳥さぬ 鳥の尾とさぬとさぬ
△さぬとさぬとさぬとさぬとさぬ

○**非**龍も指りげ **浅刺** 大さき
ありさうの河蛙夕 **浅刺** 大さき

の如くはて色へちぐみ不同
事へりトさひかりして美さず

○**飯** 鮓 **飯** 鮓 正二月の内盛
ふ出るりのありたこの

○**非** 飯 鮓 正二月の内盛
肉のしつろりねるゆよ名づく

○**春** 駒 春の諸州生出る故駒も
野とあれすかり草と

喰ふあり。諸家小養いおこ
うろ馬も初春ふりす

○**野** 野ふあれゆくさぬをよむ。○**非**
野のこく哥ふの春乃

識の春駒とくハ初春の春
駒舞とるは春駒舞のこく

初春の部小づい
春駒。春駒舞のありろを

○**非** 表約のさくさくお宗阿
くんぐよみあふ屋

必用

此部への正月一ヶ月の天
氣の見ず其外必用の事のと

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
	丑の方	寅の方	卯の方
軍	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
	辰の方	巳の方	午の方
星	朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
	未の方	申の方	酉の方
向	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	戌の方	亥の方	子の方
方	戌の方	亥の方	子の方
	亥の方	子の方	子の方
角	戌の方	亥の方	子の方
	亥の方	子の方	子の方

右の如く正月酉の刻 破軍の
斂鋒丑の方小向戌の刻 破軍の

寅の方小向亥の刻 四ツ時辰の方
小向次 兼ふ順ふ一時宛てあり

○酉の時より 操出と事ハ星ハ夜と
主なるゆへ暮六ツ時より出初る

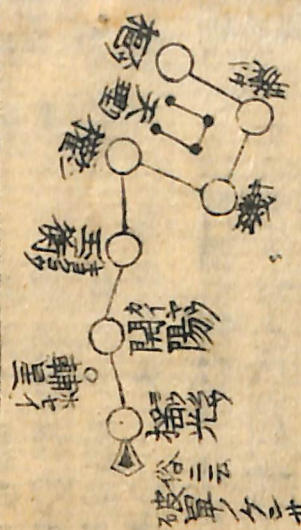
破軍のくさ死向方へむい合
あるりて 争論又何事かて

万事利ありは是天地の氣令の
應どる處るん能々けむべ

○三才圖會曰く昔唐虞の世ハ正
月酉の刻ハ破軍星寅の方へ向

とくどく夫より年数久しくつりて天の旋少宛替り今よりその口への其星のあふ所と圖かあはす

北斗七星之圖



第一の星と樞と云第二と璇と云第三と璣と云第四と權と云第五と棓と云第六と開陽と云第七と摇光と云

天氣

北斗魁星の間黒くほや光りてあふ雲傍小

あまの其夜雨ふる○北斗の前に黄なる雲氣あまの翌日風ふくもほや光りてあまを其夜大よ雨ふる○黒く黄く白きほや光りてあまを長さ三丈余りあまのく北斗とよまといて散ざまは三日の内かふる雨降りさまけまは人安和なる事なるなり○り雲氣北斗とあまのて蒼黒く大よ雨ふる黒ろさの風多し黄白なる翌日大に熱し○白氣あまの北斗の前をさるる事と起る是正月にめざらばつづの月ふても同し事○今月上旬丙寅の日あまの夏雨多戊寅の日あまの秋雨多壬寅の日あまの冬雨多

天氣占候

今月上旬雨多くあまの米價貴し中旬の

雨も米價亦貴し。○甲乙の日雨ふまは春中雨多し。丙丁の日雨ふ

まは夏雨多し。○庚辛は日雨ふれ

ば冬雨多し。○今月中零雨ふれ

秋小至。○日刻 万事刻限を定むるは當月の寅

出水あり。○日刻 万事刻限を定むるは當月の寅

の日寅の刻。○丑の日世の刻万の

事とどろく用ゆる守利のさるこ

出行作事 正月の天道南の

まは出行あるも南の 樂事と

方に向ふて吉あり

けく日光も美しくて父母の壽

親族相識互に賀し心も

き立勇し梅の色香諸木

勝は鶯の声乃若くは

薄く霞ある遠山のありき

何れ長閑けしうさるん

正月飲食 料理献立

禁猪肉は月を六神狐換。○葱は月

物はくへは魚は種物は生と。○梨蓼

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

まはかた。○鰯魚頭まは出あり食

うぐいのこさすりませ銅ちくし
 うそすい煮るこ〇うり鯛おつ
 たくろ子とくたうすきさうゆ
 かくぢげんくそ出うさぬ鯛も子
 も入ぶてゆつて出とゆすじ
 ていあし〇そろうこいりか
 せんいさぎまうくゆにてくづ
 きさうゆそ出と〇あんう
 汁のうとそ死おろ一切てか
 も身とも少湯へ入あうこ
 時あけて水もろり其後酒
 をけ置と汁少立んとこ
 魚を入時 鳥 ほろばんか
 うぐす 物 うづるそとす
 野菜 ふきうどなづかちこ
 わらまんとう。このをふさい
 せだま。もうごかう。ほくぐ
 うごご。たんやぐ。多草。水
 きうろ。そのわ。うぐす

正月終

煮漬物しゆじもの

重組じゆうぐみ
小辨せうべん

むとひ鼓
口 ぬは

推おし
け

さんまん

さんかん

ゆりぬ

くらあ

たひた

こうたけ

漬松ひ

ちやうた

ひらぐり

このも

長し

梅うめ
甲か

うりど

さめしけ

ふふ
台たい

あしけ

〇右内みぎうち各二ご京きやう漬じゆきぎ

佃重てんじゆう

組者ぐみしや
相あい

垢かんかんががく

ちんちんひひ

まらんこ

むと拾

ふふここたたうう

生貝なまがひ

まらんこ

ちんちんかかららここままそそ

白炙しろあじ

きんきんああまま子こ小串

ひひたたたたひひ

はい

きりり

小串

ととぬ

厚あつききこ

赤あか貝がひ

小串田糸

あなあなこ

酢すここ

車くるまああびび

小串

白炙

さんさんままんん

あしけ

生貝

ああびびふふ

さんさんままんん

捨すててんてんくく

小串

かかううここけけ

押おしまま子こ

押おしままんん

ううけけ

精進料理

膾炙人口

大さく人 推しけ

うご 七さくも
あけ 五さくも
さくも

さくもさくも
本うけけ
つら

漬物さけ 中さく
大さく人 中さく

さく 吸さく
推し

さく 大さく人
つさ 推しけ

根いも
さく

糸割さく
さく人
さくの

竹桶さくぬ
さくさくけ

さくさくけ
あけ栗

はさく
中さく人
さくさくけ

煮物

大年。さく人
さく

土佐ぬ
さくいけ

大さくさく
あけさく

かすく由
漬物さくけ
さく人竹

煮物
推しけ
さくも

和物

糸さく
あさく

糸さく
はさく
さく人

さくさく
さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく
さくさく

さくさく

さくさく

